元総社明神遺跡XII

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1994

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡 XII

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．元総社明神遺跡 33トレンチ出土遺物

2．元総社明神遺跡 B-1号掘立柱建物址出土遺物

3．元総社明神遺跡 βトレンチ南区

序

群馬県前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山を、西に榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠く古墳文化の時代には東国の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世では、利根川をはさんで前橋城と総社城が築造され、近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織り成した様々な情景が満ちあふれています。

元総社明神遺跡が所在する元総社地区では、近年、都市基盤整備の必要性が高まり、土地区画整理事業が実施されてきております。それに伴ない、この地区が古代上野国の中心地域であったと推定されることから、確認調査の結果協議により、昭和57年度より開発予定地の道水路部分を中心として事前の発掘調査を実施してきており、本年度で第12年次を迎えました。

本年度は、既存道路の拡幅箇所と新設道路の調査を実施しました。限られた範囲の調査でありましたが、住居址・溝址・井戸址・掘立柱建物等が検出され、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、元総社第三明神地区区画整理審議委員の方々、前橋市区画整理第一課の担当者及び隣接住民の方々、さらに発掘調査・整理作業に従事していただきました作業員の方々の厚い御理解と御協力を得まして、無事調査を終了することができましたことに深く感謝申し上げます。

平成6年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　有坂　淳

例　言

1　本報告書は、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業にかかわる元総社遺跡発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地　群馬県前橋市元総社町2424番地・総社町3586番地外

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　有坂　淳）の指導もとに、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業施行者（前橋市長藤嶋清多）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役須永眞弘）が実施した。

4　調査担当　大山知久（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　発掘調査係員）
　　新保一美（スナガ環境測設株式会社　調査員）

5　遺跡名・遺跡略称　元総社明神遺跡　　5 A61

6　期間　　発掘調査　平成５年９月10日～平成５年11月25日
　　調査整理　平成５年12月１日～平成６年３月20日

7　調査面積　602㎡

8　出土遺物は、前橋市教育委員会が保管する。

9　発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとに新保一美が発掘調査を担当し、調査・測量・遺構写真撮影等の作業を勝田貞幸、作業事務は須永豊が担当した。

10　本書は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとにスナガ環境測設株式会社　文化財調査部が作成にあたり、執筆・編集・校正を新保一美が行なった。ただしⅠ・Ⅱ章については元総社明神遺跡Ⅺ他の引用とした。測量図書の整理・校正には勝田貞幸があたり、遺物の注記・復元等は神津芳夫・鈴木赳夫・須永薫子・福田義徳、実測は佐々木智恵子・角田朱美、遺構・遺物のトレースは小林裕美、製版写真・版下作成は鈴木赳夫・佐々木智恵子が、内業事務は柴崎信江が担当した。

11　調査に参加した方々。

飯島いし・石川サワ子・内山恵美子・中野鶴市・丸山金平・三川昭一・山崎勘治

凡　例

1　挿図に建設省国土地理院発行の1/200,000地形図（長野・宇都宮）と1/25,000地形図（前橋）をもとにして、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が加筆した図版を使用した。

2　各遺構の略称は次のとおりである。

H…土師器使用の住居址　W…溝址　I…井戸址　B…掘立柱建物址　D…土坑

P…柱穴・貯蔵穴　T…竪穴状遺構

3　遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺跡現況平面図　S＝1:100

遺構実測図　S＝1:30　1:60を原則とし、掘立柱建物址については1:100とした。

遺物実測図　S＝1：3を原則とする。

上記以外の縮尺を利用するときはその都度表示した。

4　土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版標準土色帖」によった。

目　次

序

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の位置と環境……1

1　遺跡の立地
2　歴史的環境

III　調査の経過

1　調査方針……7
2　調査経過……8

IV　層　　序……9

V　調査区の遺構と遺物……10

1　32トレンチ……10
2　33トレンチ……11
3　β トレンチ……19

VI　まとめ……23

図　　版

口絵　1　33トレンチ出土遺物
P 1.　出土遺物写真
出土遺物写真
出土遺物写真
口絵　2．3　B－1号掘立柱建物址・同出土遺物
遺構写真
遺構写真

挿　　図

Fig. 1　元総社明神遺跡の位置……2
Fig. 2　元総社明神遺跡立地図……4
Fig. 3　元総社明神遺跡周辺図……6
Fig. 4　グリッド設定図……7
Fig. 5　元総社明神遺跡標準層位……9
Fig. 6　32トレンチ全体図……33
Fig. 7　32トレンチ遺構・遺物図……34
Fig. 8　33トレンチ全体図……35
Fig. 9　33トレンチ遺構（1）……37
W－1・W－2号溝址
Fig.10　33トレンチ遺構（2）……38
H－2号住居址－1
Fig.11　33トレンチ遺構（3）……39
H－2号住居址－2
Fig.12　33トレンチ遺構（4）……40
H－6・H－7号住居址
Fig.13　33トレンチ遺構（5）……41
井戸址
Fig.14　β トレンチ全体図……42
Fig.15　β トレンチ遺構（1）……43
H-1・H-2号住居址，W-1号溝址
Fig.16　β トレンチ遺構（2）……44
B－1号掘立柱建物址－1
Fig.17　β トレンチ遺構（3）……45
B－1号掘立柱建物址－2
Fig.18　出土遺物実測図－1……46
Fig.19　出土遺物実測図－2……47
Fig.20　出土遺物実測図－3……48
Fig.21　出土遺物実測図－4……49

表

Tab.1　遺物観察表……26
Tab.2　土坑表……28

I　調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理第一課との協議により、道水路部分を中心に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57・58年度の２ケ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性も鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が代表者前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年４月18日・平成３年１月８日および平成５年８月26日付けでその内容を一部変更している。

平成５年度の調査は、委託者から平成５年９月１日付けで調査依頼書が提出され９月10日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成５年９月10日から11月25日まで行ない、整理作業は平成５年12月１日から平成６年３月20日まで実施した。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、両者の地溝をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、現利根川氾濫原の４地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前に浅間火山の爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山麓に広がる相馬ケ原扇状地と移行部をを形成し、本遺跡地までおよんでいる。東は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されている。微地形的に多少の起伏はあるものの、ほとんど平坦台地面といえよう。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を南東方向に開析し、前橋台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３～５ｍをもって南東方向に流れている。段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畑として利用されてきた。またこの台地上は恰好の居住地であったらしく、

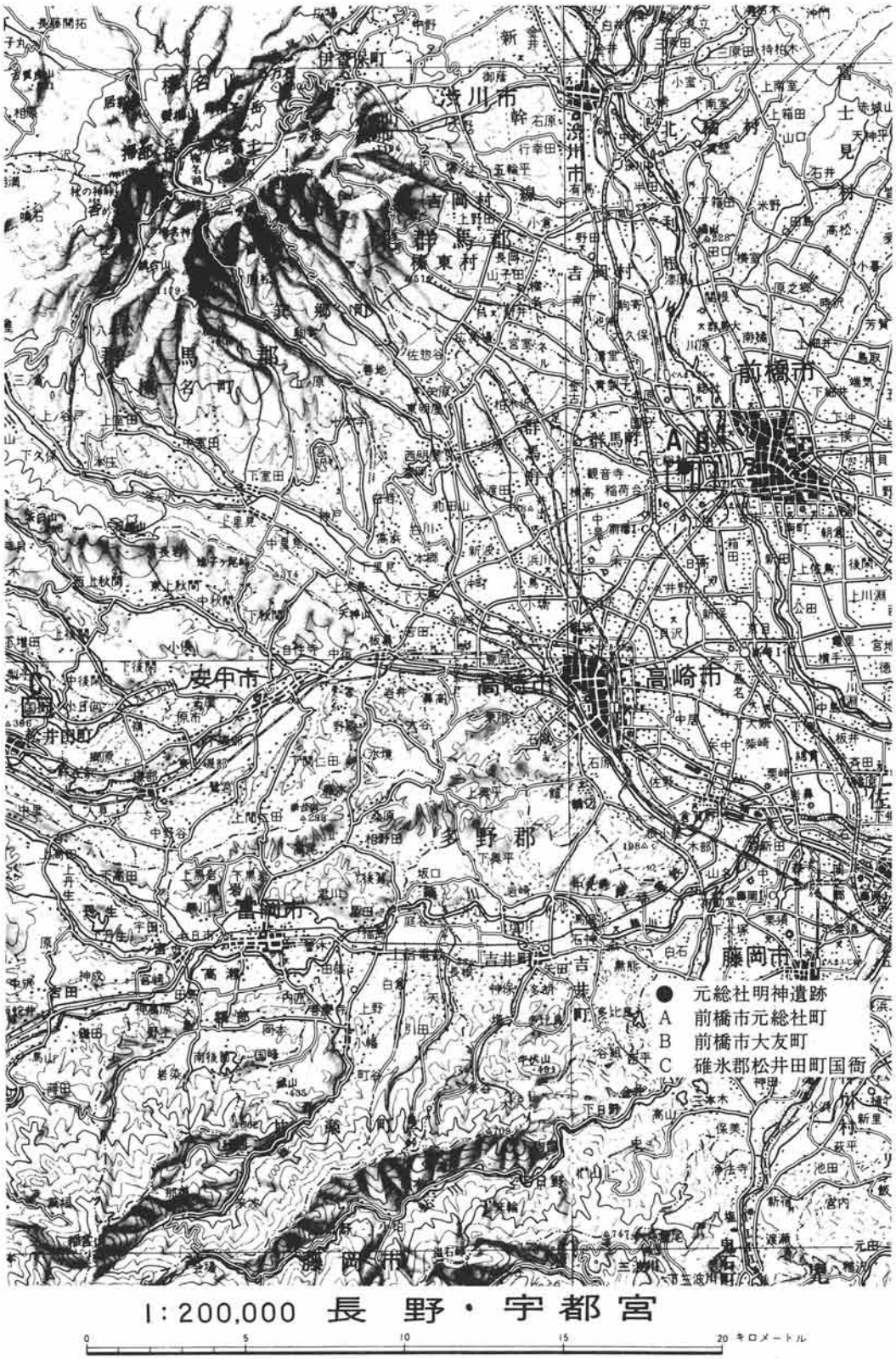


Fig. 1　元総社明神遺跡の位置と上野国府

古墳時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺跡が残されている。

元総社明神遺跡の本年度調査区は、前橋市元総社町・総社町に所在し、群馬県庁より西へ約2km、ＪＲ上越線新前橋駅より北西へ約1kmの地点に位置している。本遺跡地は、利根川の右岸に位置し、前橋市街地と川を挟んで対峙する形になっている。群馬郡群馬町東牛池沼に発し元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かって緩やかに傾斜し、その比高は3～4mを測り、右岸の段丘上には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。本遺跡地の南側には、国道17号（通称高前バイパス）、主要地方道前橋・群馬・高崎線（通称前橋・安中線）が、東側には市道大友・石倉線（通称産業道路）、遺跡地内を県道足門・前橋線が走っている。これらの幹線道路を中心にオフィスビルや商店・住宅が建ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112～117mの北西から南東に向かいわずかに傾斜する地形が窺える。

2　歴　史　的　環　境

本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世に至っては蒼海城が築かれた。それらを含めた歴史的推移を見るために、時代別に遡って周辺の歴史的環境の概略を把握しておく。縄文時代では、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落を筆頭に挙げることができ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に熊野谷遺跡、下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里陣馬遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などが列挙され、時期的には前期から後期初頭の範囲に及んでいる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居址が検出された国分寺中間地域遺跡、桜ケ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生じるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するためであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、5世紀後半である。利根川右岸段丘上に、主軸で70mを超す前方後円墳の遠見山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約2kmには、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、川原石を用いた積石塚である王山古墳、次に国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室を持つ愛宕山古墳、県内最終末期と考えられ、仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500mに所在する山王廃寺にみられる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。その共通する技法から時代決定を知る根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら開花した様子を

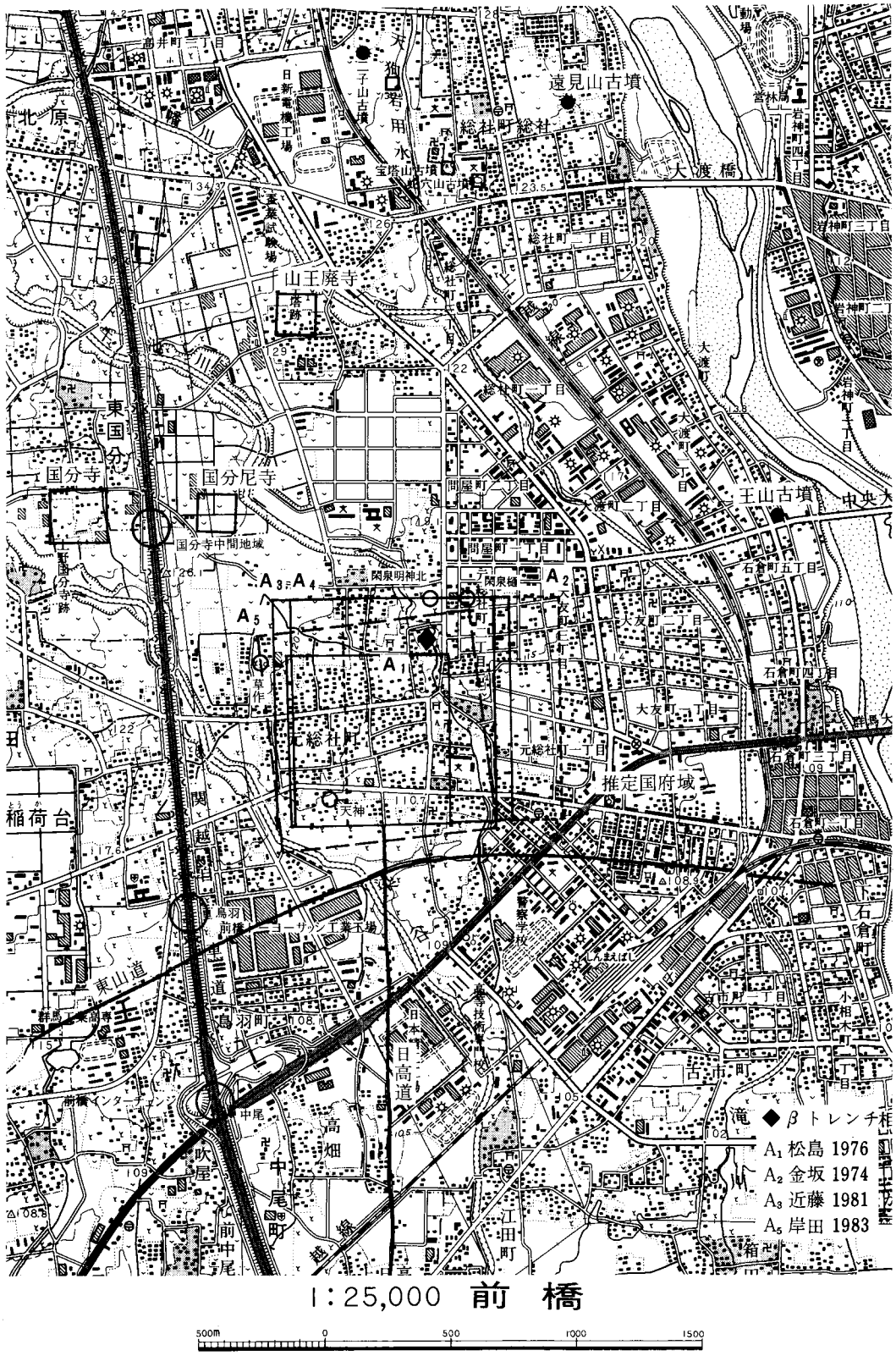


Fig. 2　元総社明神遺跡の調査地点と上野国府学説

窺うことができる。

奈良・平安時代に至ると、上野国府・国分二寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野国の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については、11年次にわたる発掘調査と戦前からの研究史がある。また推定国府の周辺遺跡では、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒遺跡等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化２年(646)の改心の詔の二に「初脩京師　置畿内国司郡司…」(日本書紀巻25) とあり、国司制度とともに殆どの国府が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府が既にできていたものと推定される。また、『倭名類聚鈔』によれば「上野国　国府在群馬郡…・」とあり、その位置として「群馬久留米国分為東西二郡府中間国分」の記述がある。これらの文献および総社神社の『上野国神名帳』研究等により、当地域に国府があると想定され、地名や地割りからいくつかの想定案が提出されている。また、国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、その道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地遺跡等がある。これらの遺跡からは、膨大な数に上る奈良・平安時代の住居址が発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では飛躍的に集落の拡大したようすが窺われる。

中世には蒼海城が築かれ(1429)、長尾氏の城下となり、現在の街路の祖形は、その時の蒼海城の堀割りを利用したものと考えられている。また蒼海城の縄張り自体も国府域を利用しているものと推測され、国府の解明をより複雑にしている。

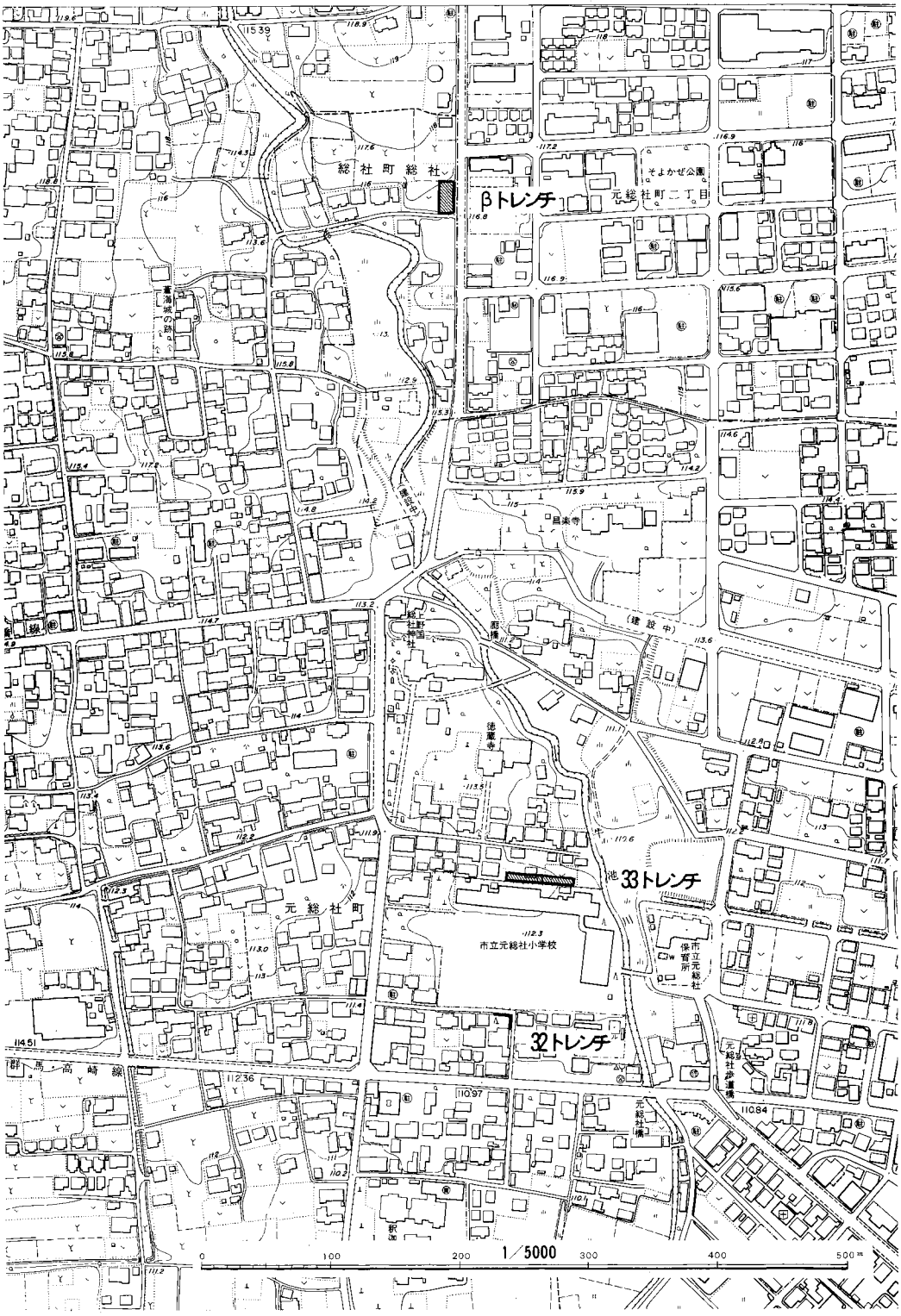


Fig. 3　元総社明神遺跡調査地点

III　調査の経過

1　調査方針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今年度で第12年次を迎えた。調査対象地が道路部分であるため狭い調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に追随して、その後も共通な呼称法が採られ、東西方向に延びる調査区をアラビア数字で、南北方向に延びる調査区をアルファベットで呼称してきている。また南北方向に使われたアルファベットはZトレンチに達し、それ以後ギリシャ文字を使用している。この慣例に従い今年度の調査区はそれぞれ32トレンチ、33トレンチ、βトレンチと呼称している。

各調査区のグリッドはすべて公共座標に基づき、4m毎に設置し、東西にアルファベット、南北にアラビア数字を付番し、北西方向の杭の名称をグリッド名称とした。平面座標等の移動は、区画整理に伴う近接した基準点を利用して測量した。また、各調査区が離れていたためにトレンチ毎にグリッド名称を付けた。各トレンチは第IX系に当たり、32トレンチのC－1グリッドの公共座標はX＝42,728.000m、Y＝－71,000.000mであり、33トレンチのC－6グリッドは北に丁度100mに設定したものでX＝42,828.000m、Y＝－71,000.000mである。しかしながらβトレンチは距離があるため整合性を図ることができず、単独に設定した。B－1グリッドをX＝43,368.000mとし、Y＝－71,048.000mである。

グリッド設定と並行してプラン確認を行ない、直ちに調査にあたった。与えられた調査日程の都合で基本的には「使用面」のみの調査とし、プラン確認の難しい遺構については

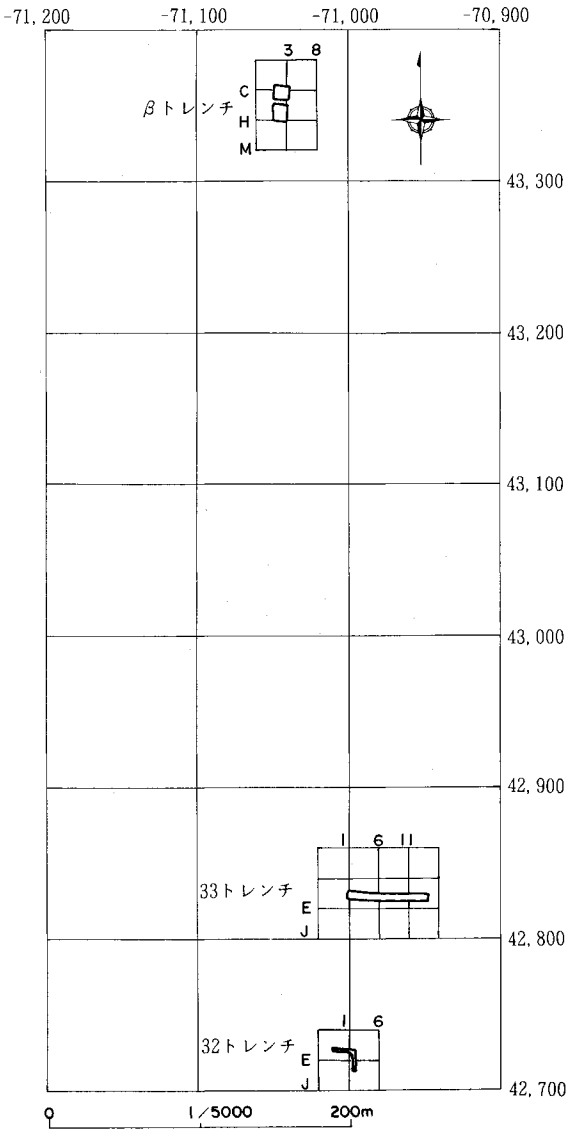


Fig. 4　グリッド設定図

「掘り方」の面まで調査を実施した。図面作成は平板・簡易遣り方測量を用い、平面図は1/40の縮尺　で、断面図は1/20の縮尺を原則とした。また必要に応じて1/10の縮尺図も作成した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、重要と判断した遺物については、遺物分布　図、遺物台帳に記載を行ない付番処理をして収納した。

2　調　査　経　過

今年度は、平成５年９月10日に発掘調査委託契約を締結後、ただちに発掘資材等の搬入を行ない、同時に調査区の草刈りや休憩施設の設営等に着手した。同13日、32トレンチの調査を開始する。小学校の南門に接する道路際の調査となるため、安全対策を講じる作業と並行して、表土除去を行なった。調査区が狭いため小型掘削機によるトレンチ掘削を実施し、プラン確認、精査にとりかかった。激しい被攪乱のため遺構が破壊されており、短期間で作業が終了し、同18日には人力による埋め戻しが完了した。

20日には埋め戻し後の整地補修を行い、引き続き33トレンチの表土掘削を大型重機によって開始した。トレンチ全面が著しく攪乱され、あるいはゴミの埋め場所と化していたため、遺物包含層までの掘削とし、サブトレンチやグリッドを掘ることによって、地層断面等から遺構存在の確認を行なった。

途中、Ｗ－１号溝址と呼称した溝の表層が崩落し、小学校の塀に沿ったトレンチであったため、休日も欠かさず安全確認と点検を繰り返したが、その後に大きな変動はなく、この点を除けば順調に調査を消化し、10月26日には重機による埋め戻しを完了させた。

βトレンチは、関係者への挨拶・折衝を繰り返し、11月１日より大型重機により表土掘削を開始した。幹線道路に面し、生活通路の確保を要する狭い範囲内での作業となったため、交通状況によっては重機の回転もままならぬ作業であったが、10日には北区の調査を終わった後の埋め戻しが終了し、引き続き南区の表土掘削後、100余基の土坑の半裁・完掘調査等を実施した後、20日に埋め戻しを行ない、同25日には残務処理等を済ませ、本年度予定の調査部分をすべて完了した。

Ⅳ 層　　序

本遺跡のうち、32トレンチと33トレンチは総社砂層の直上まで攪乱を受け、いずれも標準とするに足りない層位の状態であった。βトレンチの所在するところは、前年度に発掘調査された元総社明神遺跡XIのC区に隣接しており、現状は畑地となっていたため、ここを標準土層と定めた。

本遺跡地は、前橋泥流層が浸食された所に堆積する前橋泥炭層が相馬ケ原扇状地の堆積層の上に位置し、相馬ケ原扇状地の末端に立地することが知られる。

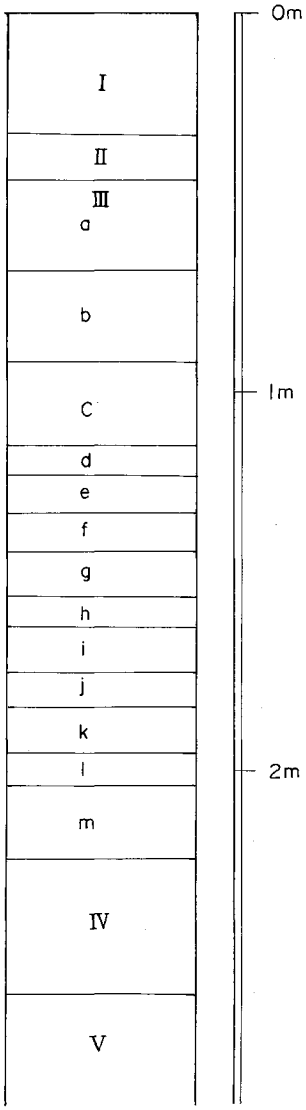


Fig. 5　標準層位

I　層：耕作土
　暗褐色細砂層　粗砂を混じえる

II　層：黄褐色細砂層

III　層：総社砂層（縄文時代に形成）
　a……明黄褐色細砂層
　b……鈍い黄橙色粗砂層
　c……鈍い黄褐色微砂層
　d……黄褐色細砂層
　e……鈍い黄褐色シルト層
　f……灰黄色シルト層
　g……暗褐色微砂層
　h……暗灰黄色細砂層
　i……黄褐色微砂層
　j……オリーブ褐色シルト層
　k……鈍い黄褐色粘土層
　l……黄褐色シルト層
　m……鈍い黄褐色粘土層

IV　層：前橋泥炭層上部
　黒褐色泥炭層
　　As-Sj　（約11,000年前）を含む

V　層：相馬ケ原扇状地堆積物
　オリーブ褐色砂礫層
　　As-YP（約13,000～14,000年前）を含む

V 調 査 区 の 遺 構 と 遺 物

1　32トレンチ

（1）概　観

本トレンチは、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した『元総社明神遺跡X』（平成３年度）の30トレンチの東側に延長される部分であり、元総社小学校校庭の南側を走る道路がＬ字形に曲がる内側部分である。

元総社小学校校庭は、昭和36年、群馬大学の尾崎喜左雄博士を中心に調査され、梁間５間、桁行２間の、四角の掘り方に根を粘土で固めて丸柱を置いた建築遺構が検出されている。また土師器を伴う住居址が７～８軒検出され、国府調査の先駆けとなった場所である。(元総社小学校校庭遺跡)

既述の30トレンチの調査では、国衙関連の遺構は検出されていない。本トレンチの調査前の状況は、区画整理事業に伴い更地となっていたが、かつては個人住宅の屋敷森であった。したがって、表層はトレンチ全面にわたって土の入れ替えがなされ、各所にゴミ穴等による攪乱を受けていた。

トレンチ掘削は調査面積が37㎡と少なく小型重機によって行なったが、小破片となった遺物が多量に混入していたため、遺物包含層の直上までとし、さらに人力によって各層毎に掘り下げを行ない、総社砂層上面までの入念な遺構検出作業に当たった。

その結果、旧地形は、東方向に16/1000の傾斜を、南方向は、25/1000の斜度を示しており、東西方向のトレンチでは、平均約50cmで総社砂層のハード面となったが、木根跡によるとみなされる土坑が存在するのみで、遺構の確認には至らなかった。南北方向では、北側で40cm、南側で60cmの深さで総社砂層の上面に当たるが、その直上まで攪乱を受けていた。

遺物は総数404点を数え、古墳時代、奈良・平安時代はもとより、中・近世の内耳鍋・ホウロク・飯茶碗などが７点も出土している。またコーナー部攪乱土層を中心に瓦片が16点出土しており、そのうち東西トレンチからはヘラ描きされた文字の一部が残る瓦片が一点出土している。［寸］と読めるが、上部が欠損しており、［寺］の旁と考えられる。

（2）各遺構と遺物

住　居　址

Ｈ－１号住居址（挿　図　Fig. 7　　写　真　Pl.20）

位　置　E－1，F－1グリッド　　32トレンチの南端部

形状等　トレンチ内に方形プランを持つ住居址の西北端部がかかっている。調査面積は4.4m²で、南北4m、東西1.1m、深さ11cmで、北側確認面直上及び住居址の南端部は攪乱を受けている。総社砂層を掘り込んで作られ、床面はほぼ平らで、中央部に堅緻面を持つが、北部は砂質土であり、南部は床下に及ぶ攪乱を受けていたため、床面の確認はできなかった。この攪乱層直下に周溝状の落ち込みのある直線の掘り方が認められたので、これを本住居址の南壁とした。

遺　物　平安期の土師器片と灰釉陶器を床面直上から数点検出したが、いずれも実測に耐えるものではない。

H－2号住居址（挿　図　Fig.7　　写　真　Pl.20）

位　置　D－1，F－1グリッド　　H－1号住居址の北側

形状等　トレンチ内に住居址の東端部を見せている。調査面積は2.1m²で、南北2.6m東西1mを測る。確認プランは台形であり、東壁の一部に竈址と思われる焼土が薄く広がっていた。床面は堅緻面を持たず、明確にし得ないが、遺物や石の出土レベルから判断して、残存高5cm強である。

遺　物　ロクロ成形の土師器の坏を始め、遺物出土量は面積の割りに多いが、実測に耐え得るものではない。

備　考　壁長が短い割りに遺物が多く、あるいは竈屋のような遺構かとも思われる。

2　33トレンチ

（1）概　観

元総社小学校の北側塀に沿った東西54m、南北5mの部分で調査面積275m²である。元総社明神遺跡Xの31トレンチ南に位置する。かつては住宅があり、また東側は藪状を呈していた。

トレンチ全体の西側2/3程は、建築廃材や破損家具等が埋め込まれ、残りの東側部分は木根による侵食やトレンチャーによる縦横の攪乱を受けていた。西端から1/3までは総社砂層直上まで重機による開削を行ない、残りの部分は遺物包含層上面までとし、人力によるサブトレンチ掘削やグリッド掘り下げによる遺構検出の方法を採った。H－2号住居址以降の住居番号を付したものは全てこの方法で確認検出したものである。しかしながら東端から1/3までは、自然攪乱に加えて人為的攪乱が著しく、最終的には総社砂層直上の掘り方の面に及ぶ遺構確認調査とした。その結果、溝3条と住居址10軒（うち竈のみのもの2軒）、井戸址3基、土坑7基を検出し調査に及んだ。

出土遺物は総数13,239点で、古墳時代から奈良・平安時代にわたっている。特に盤・瓶・硯・

灯明用に使われたと思われる内黒研磨暗文入りの坏等は、当該区における国府との関連性を物語る資料と思われる。

（2）各遺構と遺物

溝　　址

W－1号溝址（挿　図　Fig. 9　　写　真　Pl.22）

位　置　B－0，B－1グリッド

形状等　本トレンチ西端に位置し南北に走行する。元総社明神遺跡Xの31トレンチW－2号溝址と近似している。このW－2号溝址は東端から約20m程東西に走行し、そこから緩やかに南に曲がり、約32m程で31トレンチの外にはずれてしまう。蒼海城の絵図には堀として載っていないもので、その性格については不詳である。今後31トレンチと33トレンチを結ぶ調査でこのW－2号溝址が延長する証が得られないものとすれば、31トレンチの西端近くでほぼ直角に折れ込んで、本区のW－1号溝址となる可能性が高いと思われる。形状は薬研堀を呈し、上幅3.4m、下幅1.1m、深さ1.8mを測る。

遺　物　古墳時代から中世に及び、調査面積のわりに多くが検出された。古墳時代の土師器片を始め、須恵器の大甕、3点が接合された瓦片、灰釉陶器、緑泥片岩3点、内耳鍋等土師器片156点、須恵器片47点、瓦片19点を数えた。

備　考　総社砂層を切り込んで掘られている。特に指標とする軽石を見い出せず、その年代を特定することは困難であるが、古墳時代の土師器片を溝の下位から検出していることから、この開削年代は比較的古いと考えられる。

W－2号溝址（挿　図　Fig. 9）

位　置　B－1，B－2グリッド　W－1号溝址に近接した東側を平行して南北に走行する。

形状等　薬研堀の形状で、上幅1.2m、下幅0.24m、深さ1.03mを測る。

遺　物　鬼高の土師器片から、灰釉陶器までの遺物を検出する。

備　考　総社砂層を切り込んで掘られている。遺物や埋土からは、W－1号溝址とW－2号溝址の新旧関係を判別しがたい。

W－3号溝址

位　置　B－5グリッド　　H－1号住居址の北側

形状等　上幅52cm、下幅34cm、深さ15cm。

備　考　B－5グリッド。H－1号住居址の北側を南北に走行する。平安時代の土師器片を検出

するが、精査の結果、近代の住宅の排水溝と判別した。

W－4号溝址

位　置　B－6，C－6グリッド

形状等　上幅36cm、下幅20cm、深さ平均10cm。

位　置　B－6グリッドを南北に走行する小溝、H－1号住居址の北側、H－2号住居址の西側コーナーをかすめて走行する。

遺　物　国分期の土師器小片を中心に出土するが、流れ込みと思われる古墳時代の土師器片も混入する。

住　居　址

H－1号住居址

位　置　B－5，B－6，C－5，C－6グリッド　住居址の南半分はトレンチ外となる。

形状等　壁長は長軸4.6m×短軸(3.3)m、調査面積10.2㎡。方形のプランを持ち、総社砂層を掘り込んで作られ、床面レベル標高112.01mを測る（以下標高)。床面は堅緻で間仕切り状の狭く浅い溝を持つ。柱穴と思われるピットが2基検出された。竈は東壁のW－4号溝址の延長上に焼土ブロックが認められた。またトレンチ南壁に半分隠れて、灰掻き穴状の浅いピットも検出された。

備　考　上層からは、奈良・平安時代の土師器片や須恵器の羽釜片が出土するが、床面に近いレベルでは古墳時代の甕が検出された。この遺物と壁面方位がH－2号住居址と同一であることから、本住居址を古墳時代のものと判断した。

W－4号溝址、H－10号住居址と重複している。新旧関係は、本住居址の方がW－4号溝址より古く、本住居址の竈部分に焼土が残っていること等から、H－10号住居址より新しいと判断した。

H－2号住居址（挿　図　Fig.10,11　　写　真Pl.28・29）

位　置　B－6，B－7，B－8，C－6，C－7グリッド

形状等　主軸を南北に対してほぼ45度傾けて作られ、本トレンチ一杯に住居址の南2/3を占める大型の住居である。壁長は長軸5.5m×短軸5.3m、調査面積21.85㎡。床面レベル111.87mである。床面は総社砂層を掘り込んでいる。方形のプランを持ち、壁際の一部には周溝が認められた。柱穴は住居コーナーの対角線の交点にしっかりとした、ピットを設け、対角線上にそれより浅いピットを配する形である。また竈の両側には壁柱穴を持つものと思われる。

竈は、残長２m幅1.2mで主体部を住居内に置き、壁面から垂直に立ち上がり、住居外に煙道部を導く形状であるが、煙道部は小学校の塀の工事によって切られていた。

床面の竈前には比較的広い範囲で焼土が広がっていた。特に、竈の右袖部分には厚い堆積を示していた。

東側コーナー部には、上端で81cm×58cm、下端で38cm×26cm、深さ64cmの方形の貯蔵穴を有する。

遺　物　上層からは、灯明皿や平安時代の土師器片が出土している。竈主体部の上からは、甕と甑のセットが断片として検出され、残りは竈右袖の床面に散っていた。また床面レベルで古墳時代の椀や砥石、貯蔵穴壁面には甕の頸部が壁面に付着するような状態で出土している。またサブトレンチ掘削時に滑石製の模造品を検出している。

備　考　竈については、主体部からの立ち上がりが住居壁面を思わせ、竈右の住居コーナー部に炭化層が５cm程堆積していることから、現存の竈は作り替えられたものと思われる。この竈の右前には10cmほどの厚さで焼土が拡がり、その下に貯蔵穴と思われる56cm×44cm×15cmの方形のピットが存在する。その中央部からは坏が出土したが、これはその形式から判断して、本住居址に付随するものではないと思われる。このピットは本住居址に重複するＨ－10号住居址のものとも考えられるが、位置や方位からしてＨ－10号住居址に付随するには不自然である。Ｈ－10号住居址の出土遺物は鬼高期から灰釉陶器までの広範囲にわたる。またＨ－２号住居址の上層から灯明皿が出土していることを勘案すると、11世紀後半以降の住居址が上部に存在し、その貯蔵穴が本住居址の床面に及んだものとも考えられる。新旧関係については、Ｈ－10号住居址→Ｈ－２号住居址→竈前のピットとする。

Ｈ－３号住居址

位　置　Ｃ－13，Ｃ－14グリッド

形状等　方形のプランを持つ住居址の北西部分を検出。南側は調査区外に延び、東側はトレンチャーによる著しい攪乱を受けていたため、遺物分布範囲と掘り方の面による合成プランとした。長軸（３m）×短軸（1.2m）、調査面積は6.4m²である。床面レベルは遺物の出土状況から111.85mとした。

竈は調査区外になるものと思われ、柱穴等は掘り方を含めて確認できなかった。

遺　物　住居址内の西端部は土器捨て場状態で、多量の土器と石がまとまって出土した。須恵器では大甕の体部、皿、蓋など、土師器では椀や鬼高期の坏、焔を受けて変色した高杯などの他に、手づくね製品と思われる小型のるつぼ状の土器や鉄滓が出土している。また上層からは土釜片が出土している。

備　考　本住居址は出土した土器から判断して、古墳時代のものであると思われる。土釜につい

ては、トレンチャーの掘削によってH－4号住居址に付随する遺物が移動したものとも考えられる。

H－4号住居址

位　置　C－13グリッド

形状等　遺物の分布範囲と掘り方の面から類推したプランであるが、南西のコーナー部が推定できたのみである。長軸（2.3m）×短軸（1.5m）、調査面積2.4m²である。床面レベルは遺物の出土状況から112.05mとした。住居内には上部に石を持った柱穴と思われるピットがあり、その西側にH－8号住居址の竈がトレンチ北壁から延び出ている。また西壁の延長上にH－9号住居址とした竈が、やはりトレンチ北壁から焼土面を見せている。さらに西壁はH－5号住居址と重複している。

遺　物　羽釜片が数多く見られ、トレンチ東壁の現地表から40cm程下がった位置に灯明皿が検出された。

備　考　H－8・H－9号住居址の竈はいずれも主体部の焼土が薄く残るのみであるが、本住居址内にあってそれが確認できることから、H－8・H－9号住居址のほうが本住居址より新しいと判断される。またH－5号住居址との新旧関係は、出土遺物の分類から本住居址のほうが新しいものと考えられる。

H－3号住居址から出土した土釜、本住居址から出土した多くの羽釜片、トレンチ東壁から検出された灯明皿などから類推すると、攪乱によってプランの確認には至らなかったが、本住居址を包含するグリッド内には、さらに11世紀後半以降の住居址が存在した可能性が高いものと思われる。

H－5号住居址

位　置　C－12，C－13グリッド

形状等　住居址内部にI－2号井戸址を含む。遺物の分布範囲と掘り方の面から類推した隅丸方形の住居プランであり、長軸（4.2）m×短軸（1.6）m、調査面積6.8m²である。床面のレベルは遺物の出土状況から111.93mとした。住居址内に2本の柱穴痕と貯蔵穴状のピットを認めるが、貯蔵穴とした方は位置的に住居址の内側に入り込み過ぎた感があり、あるいは別のものの可能性もある。竈も炭化物や焼土は検出されず、掘り方からの推定である。東壁はH－4号住居址と重複し北端はH－9号住居址の竈に切られている。西壁はH－7号住居址と重複する。出土した硯の断片から壁の切り合いを見たものである。

遺　物　須恵器甕の体部と、鬼高期と目される土師器高杯脚部の断片を出土する。

備　考　切り合い関係と出土する遺物の分類から、H－4・H－7・H－9号住居址のいずれも本住居址より新しいとした。I－2号井戸址はサブトレンチの開削時に既に確認されて

いることから、本住居址の床面を切り込んで作られていることが判明し、この井戸址のほうが新しいと判断した。

Ｈ－６号住居址（挿　図　Fig.12　　写真　Pl.23・24・25）

位　置　Ｂ－10，Ｃ－10グリッド

形状等　住居址の東側部分が確認されている。西側部分は建築廃材の埋め込みで壊されており、さらにトレンチャーによる攪乱を受けている。残存する北東のコーナーから推定して、方形のプランをもつものと思われる。長軸(3.2)ｍ×短軸（2.5)ｍ、調査面積7.6㎡である。床面は遺物の出土レベルから111.94ｍとした。竈は東壁に付き、焼土や炭が拡がるが、確認面で主体部の底部が残るのみであった。柱穴や貯蔵穴に該当するピット類は全く検出されなかった。

遺　物　須恵器大甕の体部と瓶の下半部が床面直上から検出され、口端部がＨ－７号住居址から検出されている。また灯明皿に使われたのではないかと思われる坏が３点ほぼまとまった位置から検出されている。そのうちの１点は内黒研磨で、植物を模したと思われる暗文が十文字に配されている。

Ｈ－７号住居址（挿　図　Fig.12　　写真　Pl.26・27）

位　置　Ｂ－10，Ｃ－10，Ｂ－11，Ｃ－11，Ｂ－12，Ｃ－12グリッド

形状等　遺物の分布範囲と掘り方の面から、隅丸方形のプランと推定した。長軸(4.5)ｍ×短軸(2.8)ｍ、調査面積は15.18㎡である。出土した盤のレベルから、床面を111.86ｍとした。住居址内に２本の柱穴と貯蔵穴と思われるピットが検出された。さらに掘り方調査時にＩ－３号井戸址と、本住居址の南西壁に平行する落ち込みを住居址内に認めたが、この落ち込みについては詳細は不明である。また住居址の東側は、Ｈ－５号住居址と切り合っている。

遺　物　サブトレンチ断面に縁の一部を見せていた盤とその上に乗っていた瓶の破片、Ｈ－５号住居址の共有部からは風字硯の一部が検出された。この硯については他の遺物との分類から本住居址に付随するものと判断した。盤上の瓶は、盤の直上までをトレンチャーが東西に走行した攪乱土層が確認されていること、盤の東側の縁に引っかかるように乗っていたことなどから、西側からトレンチャーによって運ばれたものと考えられる。

備　考　本住居址の南東壁は、Ｈ－５号住居址と重複する部分を硯の出土地点から割り出している。重複するＨ－５号住居址との新旧関係は、出土遺物から本住居址の方が新しいとする。またＩ－３号井戸址については総社砂層に及ぶ本住居址の掘り方の調査時に確認されたことと、出土遺物の分類から本住居址の方が新しいとする。

Ｈ－８号住居址

位　置　Ｂ－13，Ｃ－13グリッド

形状等　竈主体部がトレンチ北壁から延びている。確認面のレベルは111.63mである。確認した長さは120cm、幅80cm、深さ30cmである。住居プランはトレンチ断面に全く現れない。

遺　物　須恵器の底部糸切り無調整の坏や土師器の高台椀、甕片などが出土している。

Ｈ－９号住居址

位　置　Ｂ－12，Ｂ－13，Ｃ－13グリッド

形状等　トレンチ北壁に接して標高111.9mで焼土が薄く拡がっており、その下層に白色粘土が存在したため、竈の一部とみなした。粘土の東側は竈掘り方状に落ち込んでいる。

備　考　西竈となるが、あるいはＨ－４号住居址の竈となる可能性をもはらむ。しかしながら調査時点では断定し得なかった。

Ｈ－10号住居址

位　置　Ｃ－６，Ｃ－７グリッド

形状等　Ｈ－１・Ｈ－２号住居址の間に位置する。西側はＨ－１号住居址と東側はＨ－２号住居址とそれぞれ重複し明確ではないが、小型ながら方形のプランを有する住居址である。上層は著しく攪乱されていたが、Ｈ－２号住居址の壁の一部が黒色土であったため確認されたものである。住居址の北西コーナーは確認できたが南側は調査区外になり、東側はＨ－２号住居址と重複する。長軸（2.5）ｍ×短軸（2.5）ｍ、調査面積6.2㎡、床面レベルは111.8mであり、総社砂層を掘り込んでいる。

遺　物　古墳時代の甕の体部と底部、須恵器片及び灰釉陶器が出土。

備　考　著しい攪乱を受けているため各時代の土器が混入しているが、床面に近い出土の甕から古墳時代の住居址と判断した。Ｈ－２号住居址の竈前のピットを、ピット内から検出された遺物から判断して本住居址と別体とすると、このピットはＨ－１・Ｈ－２号住居址のいずれよりも新しいと考えられる。

井　戸　址

Ｉ－１号井戸址　（挿　図　Fig.13）

位　置　Ｂ－12グリッド

形状等　上部をロート状に開き、下部は垂直に総社砂層を掘り込む。径は68cm、深さ190cmで、上端に井戸を外周する状態で高まりを持ち、南東側に溝状の浅い掘り込みが走行する。

遺　物　上層からは、表面に縄目が裏面に布目が施された瓦片や厚手の高台椀、須恵器片と古墳時代の椀断片が、また下層からは内黒研磨高台椀と鬼高のIII期と目される坏片が２点出土する。

備　考　トレンチの北壁にかかる状態で検出されたため、半裁のみの調査となったが底面まで掘り下げた。外周する高まりは井戸の掘り方時に出来たものではなく、南東に延びる溝と一体となる井戸の形状を示すものと思われる。Ｈ－５号住居址とＨ－７号住居址に重複するものと思われる。新旧関係は、Ｈ－７号住居址よりは古いと思われるが、Ｈ－５号住居址との前後関係は不詳である。

Ｉ－２号井戸址（挿　図　Fig.13）

位　置　Ｃ－12グリッド

形状等　上部を大きく総社砂層まで掘り込み、下部は幾分狭くやや斜めに掘り下げたもの。径は58cm、深さ150cmである。北西部に接して土坑状の掘り込みがあり、石が敷き並べてある。

遺　物　上層からは厚手の糸切り高台椀の底部、ヘラ磨きの施された椀が、下層からは須恵器の蓋や古墳時代の甕のそれぞれ断片が出土する。

備　考　Ｈ－５号住居址内にあるが、サブトレンチ掘削時の断面に、Ｈ－５号住居址よりも上位から本井戸址の落ち込みを確認していることから、Ｈ－５号住居址よりも新しいものと判断する。

Ｉ－３号井戸址（挿　図　Fig.13）

位　置　Ｂ－11，Ｂ－12，Ｃ－11グリッド

形状等　緩やかなロート状から、下部を総社砂層まで掘り込む。径は68cm、深さ190cmを測る。

遺　物　須恵器大甕の体部、古墳時代の甕やヘラ磨きのある椀のそれぞれ断片が出土する。

備　考　Ｈ－７号住居址の掘り方調査時にプランの確認ができた。このことと遺物の分類とからＨ－７号住居址よりも古いものと判断した。

3　βトレンチ

（1）概観

本調査区は総社神社の北約350mの、総社町総社3586番地に当たり、都市計画道路3・3・9西部環状線用地である。北へ60m程の所には閑泉明神北遺跡があり、金坂、近藤、峯岸説の国府北限に当たり、東西に走行する溝が確認されている。さらにそこから東方150mの位置には閑泉樋遺跡が所在し、浅間B軽石を含んだ東西走行の大溝が調査されている。

今回の調査では、生活用通路を確保し、北部と南部に分けたうって返しによる面積290m²の調査となった。北部からは古墳時代の住居址2軒と溝1条、墓坑1基、土坑10基が検出され、トレンチ南壁際のT－2号竪穴状遺構とした所からは馬歯が、また同じくT－3号竪穴状遺構とした所からは有蹄類のものと思われる螺施状の骨が検出された。この両遺構とT－1号竪穴状遺構とした計3基の遺構は検討の結果、掘立柱建物遺構の雨落ち溝の可能性が高いものと考えられる。

南部からは100余の土坑が検出されたが、基本的には円形と方形に大別される。そのうちの方形のピットは柱穴となると判断し、堀立柱建物を測り出した。なかでもP－22号柱穴からは緑釉高台椀の底部と小片が出土し、また雨落ち溝からも緑釉の小片が出土した。

当初、トレンチ西壁際に南北の埋土部分が確認され、遺物出土量が多いためくびれ部分でそれぞれT－3・T－4号竪穴状遺構として調査を始めたが、住居址のプランとするには歪みが多く、床面が平坦にならないことなどから、これも雨落ち溝とした。

（2）各遺構と遺物

溝　　址

W－1号溝址（挿　図　Fig.15）

位　置　B－1，B－2，B－3グリッド

形状等　溝の西側は上端100cm、下端60cm，深さは西で37.5cm、グリッドライン2上の終端部で49cmを測る。溝の東側は上端で200cm、下端で140cm、深さ150cm。総社砂層を切り込み、共に東西に走行する。

遺　物　常滑片が両溝から、東側の溝からは、さらに石臼片2点と緑泥片岩が1点出土した。

備　考　当初2ラインを排土用通路としたため、W－1号溝址としたが、2ライン上に西側部分の収束部が現れ、東側と形状、深さを異にすることから別の遺構であると判断した。西側は終端部を持つことから東側より新しく、また東側は2ライン上で切れていることが判明した。

住 居 址 ： 竪 穴 状 遺 構

Ｈ－１号住居址（挿　図　Fig.15）

位　置　Ａ－１，Ｂ－１，Ｂ－２グリッド

形状等　トレンチの北壁から張り出す南側のコーナー部のみの調査である。西側は床面と同レベルで方形に掘りこまれているため、トレンチ北壁の地層断面と住居址の南東壁面の微かな変化点から住居プランを推定すると隅丸方形となるか。総社砂層を掘り込んで作られている。残存値から推定した調査壁長は、長軸2.4m、短軸2.0mであり、床面レベルは115.8m、調査面積3.4m²である。

遺　物　鬼高の坏片等を少量検出した。

備　考　西側をほぼ同一レベルのカマ掘り状の掘り込みと重複する。本住居址の西壁が切られていることから、本住居址の方が古い。

Ｈ－２号住居址（挿　図　Fig.15　）

位　置　Ｂ－２，Ｃ－２，Ｃ－３グリッド

形状等　隅丸方形で、長軸3.4m、短軸2.6m、調査面積9.4m²である。床面は均一でないが、平均115.98mとした。地下式土杭を持つ。竈は長さ90cm、幅58cmで確認時には薄く焼土が拡がるのみであった。

遺　物　土師質の高台椀、糸切り痕の残る坏の底部の他、古墳時代の坏・椀の断片の出土量が多いことから古墳時代の遺構であるとした。

備　考　Ｄ－８，Ｄ－９，Ｄ－10号土坑の３基の土坑が重複する。そのうちのＤ－８・Ｄ－９号土坑は、住居プラン内にあり、また鬼高式のIII期と目される土師器の模倣坏がそれぞれの土坑から検出されていることから、本住居址の地下式土坑とした。Ｄ－10号土坑は、プラン確認時から住居址の外側にまたがり、形状等からＨ－２号住居址よりも新しいと判断した。

Ｔ－１号竪穴状遺構

位　置　Ｃ－１，Ｃ－２，Ｄ－２，Ｄ－３グリッド

形状等　Ｈ－１号住居址と軸方向を等しくし、直角に近いコーナー部を持ち、東側の壁に竈状の突出部があるためプラン確認時に遺構とした。南端は北区のトレンチ南壁に遮られる。

遺　物　少量の土師器片が出土する。

備　考　竈状の突出部は、焼土炭化粒とも検出できず土坑と判断した。Ｃ－２グリッドには隅丸方形の住居址コーナー部を思わせる遺構があるが、南壁際はさらに南に落ち込み、平坦な床面を示さない。またその落ち込みの中に方形のピットを検出している。北区南壁際

のD－2グリッドの3ラインに近接する位置からは、有蹄類のものと思われる螺旋状の骨を検出した。また、D－3グリッドの東側に、40cm程の幅で白色粘土の散らばりを確認している。

T－2号竪穴状遺構

位　置　C－0，C－1グリッド

形状等　壁面は緩やかに蛇行し、床面も平坦で堅緻な面を持たない。

遺　物　少量の奈良・平安時代の土師器片と、北区のトレンチ南壁際からは馬歯を検出した。

備　考　住居址と断定できないためT－2号竪穴状遺構としておく。

T－3号竪穴状遺構

位　置　E－0，E－1グリッド

形状等　南区トレンチの北壁・西壁から張り出すが、平坦で堅緻な床面と明確なプランを持たない。

遺　物　奈良・平安時代の土器片を検出する。

T－4号竪穴状遺構

位　置　E－0，E－1，F－0，F－1グリッド

形状等　南区トレンチの西壁から弧状に張り出すが、平坦で堅緻な床面と明確なプランを持たない。プラン内にピットを12基有する。

遺　物　奈良・平安時代の土器片を比較的多く検出する。したがって遺構番号を付したもの。

備　考　T－3号竪穴状遺構との境界付近に幅20cm長さ80cm程の白色粘土層が拡がる。T－1・T－2号竪穴状遺構は、北区のトレンチ南壁際に鋸歯状に連なり10cm前後の掘り込みとなっている。また南区のトレンチ西壁際にT－3・T－4号竪穴状遺構が連なる。いづれも調査時点で遺構番号を付したものである。遺構内から方形のピットが検出されていること、住居址のように明確なプランを有しないことや平坦な床面を持たないなどから、南区で確認された雨落ち溝と考える方が妥当であろう。

B－1号掘立柱建物址（挿　図　Fig.16,17　　写　真　口絵・Pl.31）

位　置　F－1，F－2，G－1，G－2グリッド

形状等　南区の南壁際からトレンチ一杯に拡がる大きな遺構である。1軒の遺構とするには不備な点もあるが、現地調査の時点で判断した組み合わせにより、P－1からP－43までを螺旋状に付番した。各ピットは総社砂層を掘り込んで作られ、少なくとも底部は方形である。なかでもエレベーションを付した、P－10とP－28を結ぶ列は、大きくしっかり

とした方形を呈する。そのすぐ南に位置する列は、小型のピットが20基程並ぶが、柱間に近い所で密集する傾向があり、作り替えや補強のために掘られたものと考えられる。そのなかでもＰ－13とＰ－16は大きくしっかりとした柱穴となり、それぞれ内側にＰ－14とＰ－15を持ち、その間に雨落ち溝状の掘り込みを生じる。この部分はこの２穴を控柱として梯や階段を構築した、入口施設に伴う構造物の可能性も考えられるのではなかろうか。

遺　物　Ｐ－22からは緑釉陶器片と緑釉の小片が出土し、Ｐ－１に近い雨落ち溝からも緑釉の小片が出土している。他に灰釉陶器の断片や奈良時代の小形台付き甕と思われる口縁部の一部等が出土した。

備　考　雨落ち溝がその名称通り雨垂れによる本来の遺構に付随する二次的なものであれば、本プランとは別のプランを組まなければならない。その可能性として一つはＰ－７から北へＰ－５を通る線ができ、また溝外のＰ－８とＰ－５を通る線での組み合わせも可能性はある。いずれにしても、角柱穴に特徴的に見られるコーナー部での長軸の直角変位がここでは見られず、限られた範囲に加えて生活用通路の確保が必要であったことから部分的な視野での判断となった。

VI　ま　と　め

本遺跡地周辺は、上野国府の推定域として古代上野の政治・文化の中心地として注目を浴び、中世に至っては蒼海城が築かれ、引き続き上野の中心的地保を固めた所である。過去11年に及ぶ元総社明神遺跡発掘調査の他に、民間開発に伴う事前の発掘調査など、すでに数多くの遺跡が発掘調査され、しだいに地域の歴史を解明しつつある。元総社明神遺跡第12年次の調査では、南北500mの間に散在する3ケ所のトレンチを調査した。その結果、古墳時代や奈良・平安時代の遺構と土釜や常滑・石臼等の遺物に代表される中世に至る貴重な資料を得ることができた。

以下、各トレンチ毎に若干の所見を述べ、まとめとする。

1　32トレンチ

本トレンチは著しく攪乱されていたため、元総社明神遺跡Xの30トレンチにみられるような明確な遺構の確認はなし得なかった。しかしながら遺構が所在したであろうことは、狭い範囲から多量の遺物が出土していることから容易に知ることができる。とりわけ文字がヘラ書きされた布目瓦は、遺構との直接的な結びつきはないものの、「寸」の上部の丁度割れ口の位置に、さらにヘラ書きが横に走ることが確認でき、「寺」の一部であることの可能性が非常に高いものと思われる。この前提に立つと、この周辺に寺院遺構の存在する確証がなく、上野国分寺・同尼寺あるいは放光寺とされる山王廃寺から、竈等の構築材として搬入されたものであろう。これらの寺が衰退する時期や元総社小学校校庭遺跡の柱穴遺構との関連から、この区域での土地利用のあり方を時間差的に解明していくことが今後の調査で最も重要な課題として残されていると思われる。

2　33トレンチ

(1) W－1，W－2号溝址について

元総社明神遺跡XのW－2号溝址との根本的な相違点は、今回の調査ではW－2号溝址と付した狭い溝が平行に走行することである。本トレンチ内のW－1号溝址とW－2号溝址の東側には、古墳時代の住居址と古墳時代の遺物が大量に見られる。したがって31トレンチのW－2号溝址と本トレンチのW－1号溝址が鉤の手に曲がるものとすれば、元総社小学校校庭遺跡に古墳時代の遺構が確認されていることと合わせて、あるいは居館址が存在した可能性も考えられる。

また、松島栄治は歴史公論10に「上野国府」として上野の国府域を推定している。その説によれば本溝址の付近を国府域の東端としている。これまで調査された国府域を画するとされる大溝とは、その規模と浅間山起因によるB軽石の示標テフラが地層断面中に見られないという2点で

形態を異にしているが、本溝址の上層からは灰釉陶器・瓦片・緑泥片岩や内耳鍋等の遺物を出土している。このことは溝址が中世まで存在することの証であり、なお国府域との関連性について綿密な調査が今後望まれるところとなろう。

（2）住居址

古墳時代と奈良・平安時代の住居址が混在する。本トレンチの位置は牛池川右岸の台地上に当たり、元総社小学校校庭遺跡を初め数々の調査の結果、古墳時代から恰好の居住地となっていたことが知られる。

古墳時代の遺構としてはH－2号住居址に代表される遺構が存在し、その規模の大きさと滑石製の模造品の出土は注目に値するであろう。

また推定国府域としては、松島説ではその外縁となるが、いづれの説をとっても本位置は重要な関連性を持つ所であり、そのような状況下で奈良・平安時代の遺構として、瓶や暗文の施された灯明用具が検出されたH－6号住居址と盤や風字硯を伴出するH－7号住居址が検出され、竪穴住居ではあるが官人の居留した可能性をはらみ、国府との関連やその当時における土地利用のあり方についての貴重な資料を与えるものとなった。

（3）井戸址

調査した3基とも底部から鬼高III期と目される土師器の坏片を検出している。現牛池川での浅間山起因C軽石の堆積レベルは108m前後となり、112m前後の井戸の検出面レベルとの比高差は、C軽石が降下したとされる4世紀の時点で凡そ4mに達すると考えられる。

したがって河川の脇に位置する集落ではあるが、労力や安全性の観点からして井戸を掘削した方が有利であったのではなかろうか。

また井戸の底のレベルは平均110.2mであり、川床との比高差は2m近くに及ぶ。このことは、川からの浸水を利用した井戸ではなく、現状では湧水をみないが、かつては榛名山系からの伏流水がこのレベルで流れていた証となろう。

3　β トレンチ

本トレンチから北方約60m程には閑泉明神北遺跡と閑泉樋遺跡が所在し、国府域を画すと目される東西走行の大溝が走行する。B－1号掘立柱建物址は、各ピットが方形でありその類例を奈良時代の倉庫に見ることができる。元総社小学校校庭遺跡で確認された柱穴の形状は、方形に掘り込んで柱の周りを粘土で固めている。ここでは、雨落ち溝と考えられる所2ケ所で白色粘土の

散布が確認されているものの、柱穴内からは検出されていない。見方によっては簡略化された構造と言える。すなわち、国府の大溝が揺るぎなきものとすれば、本址と溝の位置関係及び形状からこれを倉庫としてよいであろう。

ところで、本トレンチの南区だけで100基を超す土坑が検出されている。前年度に調査された元総社明神遺跡Ⅺにおいても、狭い道路を隔てたすぐ南のC区だけでも39基の土坑が検出されている。この二つのトレンチを合わせても、掘立柱建物として組めたのはこの1軒だけである。これだけの土坑が存在するということは、元総社明神遺跡Ⅺにも記述されるように他の掘立柱建物の存在が考えられる。つまり倉庫群としての可能性を含んでいるのではなかろうか。

本遺構では角柱穴が建物の角に来た時に見せる、長軸が90°向きを変える特徴が現れないことや、雨落ち溝で区画されない等のいくつかの問題点も抱える。また他の組み合わせを試みても一長一短である。単独遺構としてではなく、掘立柱建物群としてとらえることのできる調査が可能となることが望まれる。

参考文献：前橋市史　第1巻　　前橋市史編さん委員会
元総社明神遺跡Ⅰ・Ⅹ・Ⅺ　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
和泉陶邑窯の研究　中村浩著　　柏書房
日本の美術12　巽淳一郎著　　至文堂
考古学ライブラリー　シリーズ　　ニューサイエンス社
月刊文化財　'93－10

遺物観察表

①口径②底径③胴部最大径④頸部径⑥器高⑦長さ⑧幅⑨厚さ

No.	位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴	遺存	実測区
1	32トレンチ東西トレンチ	布目瓦	⑦5.7⑧8.7⑨3.4	稠密	良好	暗灰	「寸」のヘラ書きあり外面はヘラによる縦撫で内面は桶巻き作り布目痕あり		
2	H－2 No.1	坏	①10.3②4.6⑥3.0	稠密	良好	暗黄	ロクロ水挽き整形底部回転糸切り無調整	95%	
3	H－2 No.2	椀	①12.4②8.0③12.9⑥5.9	稠密	良好	橙色	半球状口縁部横撫で内外面ともヘラ磨き	80%	
4	H－2 No.17	椀	①13.0②7.1⑥(5.3)	稠密	良好	明赤	口縁部に内稜を持ち外反する口縁部横撫で内外面ともヘラ磨き	40%	
5	H－2 No.88	坏	①10.2②5.4⑥3.2	粗	良	暗橙	口縁部外反ロクロ整形底部回転糸切り無調整	90%	
6	H－2	椀	①13.0②5.6⑥5.4	密	良	橙色	口縁部に内稜を持つ底部外面に二次焼成痕あり口縁部横撫で外面はヘラ削り内面ヘラ磨き	60%	
7	H－2	須恵器坏	①(14.0)②(8.5)⑥5.4	稠密	良好	灰色	右回転ロクロ整形底部ヘラ起こし	40%	
8	H－2 No.2	甕	②6.4③20.4④14.3⑥(25.8)	密	良	浅黄	輪積み痕が波状に見られる口縁部横撫で体部ヘラ削り後ヘラ磨き	50%	
9	H－2 No.2	甑	①22.0③21.0④18.7⑥(28.6)	密	良好	橙色	口縁部横撫で内外面ともにヘラ削り外面縦位のヘラ磨き	80%	
10	H－2 No.90		①(16.4)④13.3⑥(10.6)	密	良好	橙色	丸い体部を持つ器形頸部接合後ヘラ調整口縁部横位のヘラ研磨体部ヘラ削り後一部ヘラ研磨	10%	
11	H－2 サブトレ	滑石製模造品	⑦6.2⑧2.5⑨0.6				刀子二穴のうちの一つから部分的に欠損	90%	
12	H－2 サブトレ	滑石製模造品	⑦3.1⑧3⑨0.4				刀子か二穴のうちの一つから欠損する側面が真直ぐなことと11の例から刀子と判断した		
13	H－2 No.85	砥石	⑦6.7⑧3.6⑨1.6			灰白	良く使用された痕跡がへこみとして残る	(80%)	
14	H－3 No.4	カワラケ灯明皿	①10.5②5.1⑥2.9	稠密	良好	明黄	ロクロ水挽き整形底部回転糸切り端部ヘラ調整外周に煤付着	90%	
15	H－3 No.11	手づくね	①3.2②2.9③3.8⑥3.1	稠密	良好	灰白	坩堝状、過半分に二次焼成痕あり手捏ね後ヘラ削りを施す	90%	
16	H－3 No.26	坏	①13.0②7.6⑥3.4	密	良好	橙色	口縁部横撫で体部横位のヘラ削り	50%	
17	H－4 No.1	カワラケ灯明皿	①9.3②4.8⑥2.4	密	良好	灰白	水挽きロクロ整形底部回転糸切り赤橙色の二次焼成痕あり	80%	
18	H－4 No.2	坏	①14.9②6.8⑥4.2	稠密	良好	暗橙	ロクロ整形底部回転糸切り後一部ヘラ調整	70%	
19	C－13G No.16	甕	①18.6②(9.2)③21.5④15.2	稠密	良好	橙色	輪積み痕が明瞭に解る口縁部横撫で体部横位のヘラ削りグリッドで上げたがH－4に伴う可能性が大きい	60%	
20	H－5	滑石製模造品	⑦3.4⑧1.5⑨0.5				11・12と同種か直線的に稜が残り有孔円盤とするには孔が外に付き過ぎるため刀子と判断した		
21	H－6 No.1他	須恵瓶	①4.8②8.3③10.5⑥18.6	密	良好	灰色	ロクロ整形ヘラ起こしした底部と胴下半を布で包む胴上半と頸部を接合後ロクロ使用のヘラ調整下半部はヘラ調整比重大	90%	
22	H－6 No.2	須恵瓶	①6.2②(7.4)③12.9⑥15.1	稠密	良好	灰白	頸部・底部と輪積みによって作られた胴部とを接合ロクロ水挽き整形底部ヘラ起こしの後ヘラ削り下位に最大径を持つ	50%	
23	H－6 No.10他	須恵瓶	①8.1③11.8⑥(11.7)	密	良好	灰白	口縁部から肩までロクロ整形胴部紐作りロクロ整形後ヘラ削り21・22・23のいづれも高台部が無いため瓶子とせず	70%	
24	H－6	高台椀	①10.9②5.6⑥5.1	稠密	良好	浅黄	右回転ロクロ整形底部ヘラ起こし付け高台接合部ヘラ調整横位を基本の内黒研磨後十文字に暗文を施す口縁外周に煤付着灯明具として使われた可能性あり	90%	
25	H－6 No.1	坏	①10.3②4.8⑥3.5	稠密	良好	浅黄	ロクロ整形底部回転糸切り後ヘラ調整須恵器の酸化焼成か底部に亀裂があり一部に炭化痕があることから一時的に灯明具として使用された可能性あり	100%	
26	H－6 No.2	坏	①10.5②5.1⑥3.6	稠密	良好	浅黄	ロクロ整形底部回転糸切り後ヘラ調整須恵器の酸化焼成か内外面に黄灰色の二次焼成痕あり灯明用具として使用の痕跡有	100%	

①口径②底径③胴部最大径④頸部径⑥器高⑦長さ⑧幅⑨厚さ

No.	位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴	遺存	実測区
27	H－6 No.5	須恵 大甕 体部の一部	⑦23.5⑧16.2⑨2.3	密	良	灰色	外面は横位を基本とする叩き目後半スリ消し 内面は同心円及び弧状の叩き目後半スリ消し	断片	
28	C－10G No.2	須恵 坏	①13.6②6.9⑥4.0	密	良好	灰白	右回転ロクロ整形底部回転糸切り底端部ヘラ調整 内面に波紋状の二次焼成痕あり	60%	
29	C-10・11G	坏	①10.2②4.3⑥3.4	稠密	良好	暗橙	水挽きロクロ整形底部回転糸切り後ヘラ調整	70%	
30	H－7 No.10	須恵器瓶	③12.6⑥(12.6)	密	良好	灰色	水挽きロクロ整形22と同じ作りか同上位に最大径を持つ 焼成時の自然釉がかかる	40%	
31	H－7 No.1	高台椀	①12.9②6.9⑥6.4	密	良好	暗橙	ロクロ整形底部ヘラ起こし後高台貼付接合部ロクロ調整一部ヘラ磨き内面は粗く深い黒色研磨外面は赤色塗彩	60%	
32	H－7 No.7	盤	①23.2②19.1⑥5.5	密	良	褐灰	ロクロ整形後立ち上がり部を除いてヘラ調整底部ヘラ起こし後ヘラ調整付け高台接合部ヘラ調整粗粒の石英・長石等混入	80%	
33	C－12G No.4	風字硯	⑦9.4⑧(6.0)⑨1.0	稠密	良好	暗青	外縁を三角に作り海部を押し下げて前脚とし脇脚を付け足して全灰色全面をヘラ調整側面と底面に焼成時の自然釉がかかる擦痕あり	40%	
34	33トレンチ 表採	カワラケ 灯明皿	①8.5②5.3⑥2.2	稠密	良好	橙色	右回転ロクロ整形底部静止糸切り無調整内外に煤痕と赤褐色の二次焼成痕あり	60%	
35	C－9G	カワラケ 灯明皿	①9.3②4.8⑥2.4	密	良好	浅黄	右回転ロクロ挽き整形底部回転糸切り	80%	
36	B-11No.2 B-13No.2	坏	①20.4②11③20.5⑥7.7	密	良好	橙色	大型器形口縁部横撫で体部と底部ヘラ削り	60%	
37	B－13G No.6	須恵大甕 体部の一部	⑦13.5⑧10.8⑨1.7	稠密	良好	灰白	外面叩き目後スリ消し 横位の叩き目後スリ消し指圧痕あり	断片	
38	C－13G No.29	鉄滓 刀子か	⑦14.1(12.8)⑧3.8(1.1)				砂鉄を含む錆びが厚く付着錆びの亀裂面から鍛造刀子と判断	100%か	
39	C－13G	椀	①10.6②5.4③11.4⑥5.2	稠密	良	橙色	ヘラ削り後横位のヘラ磨き 器肌が荒れている	80%	
40	C－13G No.23	須恵器 短頸壺	③19.1④8.5⑥(14.4)	密	良	黄灰	二段の波状紋あり下段は上下を平行沈線で画される底部から体部は輪積み整形後ヘラ磨き肩部ロクロ整形頸部接合後ロクロ調整	80%	
41	C-12・13G No.2	カワラケ 灯明皿	①8.9②5.4⑥2.2	良好	良好	暗橙	ロクロ整形後一部ヘラ調整指圧痕あり 一部に煤付着	90%	
42	C-13・14G No.1	カワラケ 灯明皿	①9.2②5.2⑥2.1	稠密	良好	橙色	ロクロ水挽き整形底部回転糸切り後ヘラ調整 底部から口端にかけて煤付着	90%	
43	C－14G	カワラケ 灯明皿	①8.8②5.5⑥2.7	良	良好	灰白	ロクロ整形底部回転糸切り	80%	
44	βトレンチ 表採	カワラケ 灯明皿	①8.4②4.8⑥2.0	密	良	明黄	右回転ロクロ整形底部回転糸切り外周部ヘラ調整	80%	
45	βトレンチ D－57	緑釉 高台椀	②6.9⑥(1.4) 高台径6.6	稠密	良好	緑釉	ロクロ整形底面ヘラ起こし後ヘラ調整内外及び底面のヒビ割れ中にも釉がかかることからドブ漬けによる施釉と思われる	底面のみ	
46	βトレンチ W－1	石臼	③19.6⑥11.9				細くまばらな条痕が茶臼状に浅く掘られる中心穴と側面に回転用の角穴が対向して穿たれその部分は模様的に丸く隆起する	50%	
47	βトレンチ W－1	石臼	③(17)⑥13.1				粗い条痕が掘られる46と同じく縦長で、側面を力点とすることから鎌倉時代と考えられる		
48	βトレンチ 表採	景徳元寶					1004年初鋳　B－1号掘立柱建物址のP－23脇で遺構確認時に平裏無文検出		

土　坑　表

33トレンチ

番　号	位　　置	法 量 cm (長径×短径×深さ)	平　面　形	備　　考
D－1	B－4G.	32×28×8	円形	
2		80×54×8.5	隅丸方形	
3	B－4G.	52×52×15	円形	遺物あり須恵平安
4	B－4G.	58×34×24	楕円形	
5	B－4G. B－5G.	56×43×24	方形	遺物あり鬼Ⅲ平安須恵
6	B－5G.	140×55×26.5	隅丸方形	
7	B－5G.	94×53×33.5	隅丸方形	瓦内黒1平安
8				7と一致
9	C－5G. C－4G.	116×85×23	楕円形	須恵・土師・平安
10		Ⅰ－2と一致　大甕須恵　灰釉　古墳～平安土師		
11		55×55×19	円形	S有り
12		58×42×(30)	円形	須恵高台椀・蓋土師
13		50×50×(50)	円形	須恵土師高台椀底部

βトレンチ（D－1～10は北部、11以降は南部）

番　号	位　　置	法 量 cm (長径×短径×深さ)	平　面　形	備　　考
D－1	C－1G.	64×60×80	円形	土師1点　小型甕
2	C－1G.	153×66×80	楕円形	底部に28×24×26の角ピットあり 土師2点　須恵1点　灰釉　1点
3	A－1G. B－1G.	60×58×54	円形	上部に焼土あり　土師
4	C－1G.	34×29×10	隅丸方形	
5	C－2G.	59×47×9	隅丸方形	
6	C－1G.	171×89×44	楕円形	底部に52×43×14の角ピットあり
7	C－2G.	79×69×66	三角形	
8	C－2G.	191×90×33	楕円形	H－2床下土坑　鬼高III坏片4点
9	C－2G.	131×120×43	円形	H－2鬼高模倣坏　蓋か
10	C－2G.	214×101×44	楕円形	H－2床下から住居外に延びる
11	E－0G.	34×32×42	方形	底部角ピット
12	F－0G.	41×28×18	方形	P－5
13	F－0G.	24×22×18	方形か	
14	F－0G.	43×23×47	方形	P－6　常滑
15	F－0G.	30×29×19	円形	
16	F－0G.	57×38×48	円形	底部角
17	F－0G.	23×21×29	円形	灰釉　高台椀底部の一部
18	F－0G.	47×38×41	円形	
19	F－0G.	42×38×40	方形	P－7
20	F－0G.	35×30×28	円形？	
21	F－1G.	30×30×23	方形	P－38
22	F－1G.	48×30×42	楕円形	
23	F－0G.	50×36×36	方形	P－8
24	F－0G.	(30)×30×45	円形	
25	F－0G. G－0G.	70×57×39	方形	P－10
26	G－0G.	34×31×36	方形	P－11
27	G－0G.	27×24×22	円形	須恵器1点
28	F－1G.	50×49×32	方形	P－9
29	F－1G.	29×44×14	円形	
30	F－1G.	46×32×59	方形	P13　土師2点

番　号	位　　置	法 量 cm (長径×短径×深さ)	平　面　形	備　　考
31	F－1G.	69×38×25	円形	
32	F－1G. G－0G.	60×47×49	方形	P－39　土師1点　コの字　小型甕奈良か
33	G－0G.	36×34×39	円形	
34	G－0G.	32×24×32	円形	
35	G－0G.	35×30×51	方形	P－14　鬼高坏片1点　金雲母片岩1点　椀1点　土師1点
36	F－0G.	53×34×46	楕円形	
37	G－1G.	60×46×46	方形	P－16
38	G－1G.	38×36×(18)	方形	P－17　地断が隅を通るため深さに欠ける
39	G－2G.	58×37×42	方形	P－18
40	G－2G.	(24)×(16)×49	方形	P－20
41	G－2G.	(42)×(36)×48	方形	P－19
42	F－1G. G－1G.	52×42×45	方形	P－40　灰釉1点
43	F－2G. G－2G.	(53)×(35)×41	方形	P－41
44	F－2G.	35×27×30	円形	
45	F－2G.	42×41×37	円形	
46	F－1G.	83×79×36	円形	土師4点
47	F－1G. F－2G.	61×60×34	円形	師恵3点
48	F－2G. G－2G.	50×50×63	方形	P－42
49	F－2G.	33×28×21	円形	
50	F－3G.	24×24×31	円形	
51	F－2G.	31×28×52	円形	
52	F－2G.	40×28×52	円形	
52B	F－2G. G－2G.	53×42×48.5	方形	P－43　灰釉高台椀底部の一部
53	G－2G.	50×28×71	方形	P－23
54	F－2G.	55×42×37	方形	P－29　土師甕1点　国分への過渡期
55	F－2G.	46×46×44	方形	P－28
56	G－3G.	(58)×58×57	円形	

番　号	位　　置	法 量 cm (長径×短径×深さ)	平　面　形	備　　考
57	G－2G.	22×21×38	方形	P－22　緑釉　高台椀底部の一部 2点　灰釉1点
58	E－2G.	56×56×45	方形	P－2
59	E－1G.	61×36×55	円形	
60	E－1G.	43×38×10	円形	
61	E－1G.	68×66×31	方形	
62	E－1G.	50×(35)×18	方形	
63	E－1G.	46×32×38	方形	
64	E－1G.	54×47×38	円形	
65	E－2G.	(70)×66×46	円形	土師2点
66	F－1G.	66×32×25	円形	
67	F－1G.	40×37×43	方形	P－37
68	F－1G.	(54)×48×44	方形	P－36　土師4点　鬼高坏Ⅲ期椀 の一部
69	F－1G.	48×35×20	円形	
70	F－1G.	41×33×25	円形	
71	F－1G.	38×34×53	方形	P－35
72	F－2G.	32×29×30	方形	P－34
73	F－2G.	32×32× 8	円形	
74	F－2G.	30×25×31	方形	P－32
75	F－2G.	46×38×23	方形	P－33
76	F－2G.	24×22×35	円形	
77	F－2G.	42×38×30	方形	緑釉
78	F－2G.	41×34×21	方形	
79	F－2G.	(40)×35×22	方形	
80	F－2G.	(42)×41×17	方形	P－30
81	F－2G.	18×18×12	方形	
82	G－2G.	36×32×64	方形	P－27
83	G－2G.	48×38×43	方形	P-26
84	G－2G.	54×36×23	楕円形	Sあり
85	G－2G.	34×30×31	不定形	
86	E－2G.	58×50×19	方形	土師1点　須恵1点

番　号	位　　置	法 量 cm (長径×短径×深さ)	平　面　形	備　　考
87	G－2G.	42×42×36	円形	
88	E－1G.	62×57×16	円形	
89	E－1G.	21×19×53	方形	
90	E－1G.	30×24×33	方形	
91	E－1G.	59×40×23	円形	
92	E－1G.	30×26×35	方形	
93	E－0G. E－1G.	19×18×14	方形	
94	E－1G.	15×12×23	方形	
95	E－0G.	44×36×24	円形	
96	E－0G.	31×18×62	方形	
97	E－0G.	(45)×(45)×37	円形か	
98	F－1G.	33×32×11	円形	
99	E－1G. F－1G.	48×32×24	方形	
100	F－1G.	48×36×14	不定形	
101	E－1G. F－1G.	22×22×12	円形	
102	F－2G.	32×27×36	方形	P－31
103	E－1G.	20×18×28	方形	
104	E－1G.	24×18×20	方形	P－3
105	E－2G.	32×29×19	円形	
106	E－2G.	40×38×26	方形	土師　古墳期2点
107	E－2G.	82×52×13	楕円形	
108	E－2G.	29×23×21	方形	
109	E－3G.	(54)×(54)×21	円形か	
110	E－3G.	28×(28)×8	円形	
111	F－0G.	(24)×21×(23)	方形	
112	F－0G.	23×18×17	方形	
113	F－3G.	210×(120)×38	方形	カマ掘り　須恵2点　土師10点
114	E－1G.	48×40×(30)	方形	
115	F－1G.	38×36×35	方形	P－4

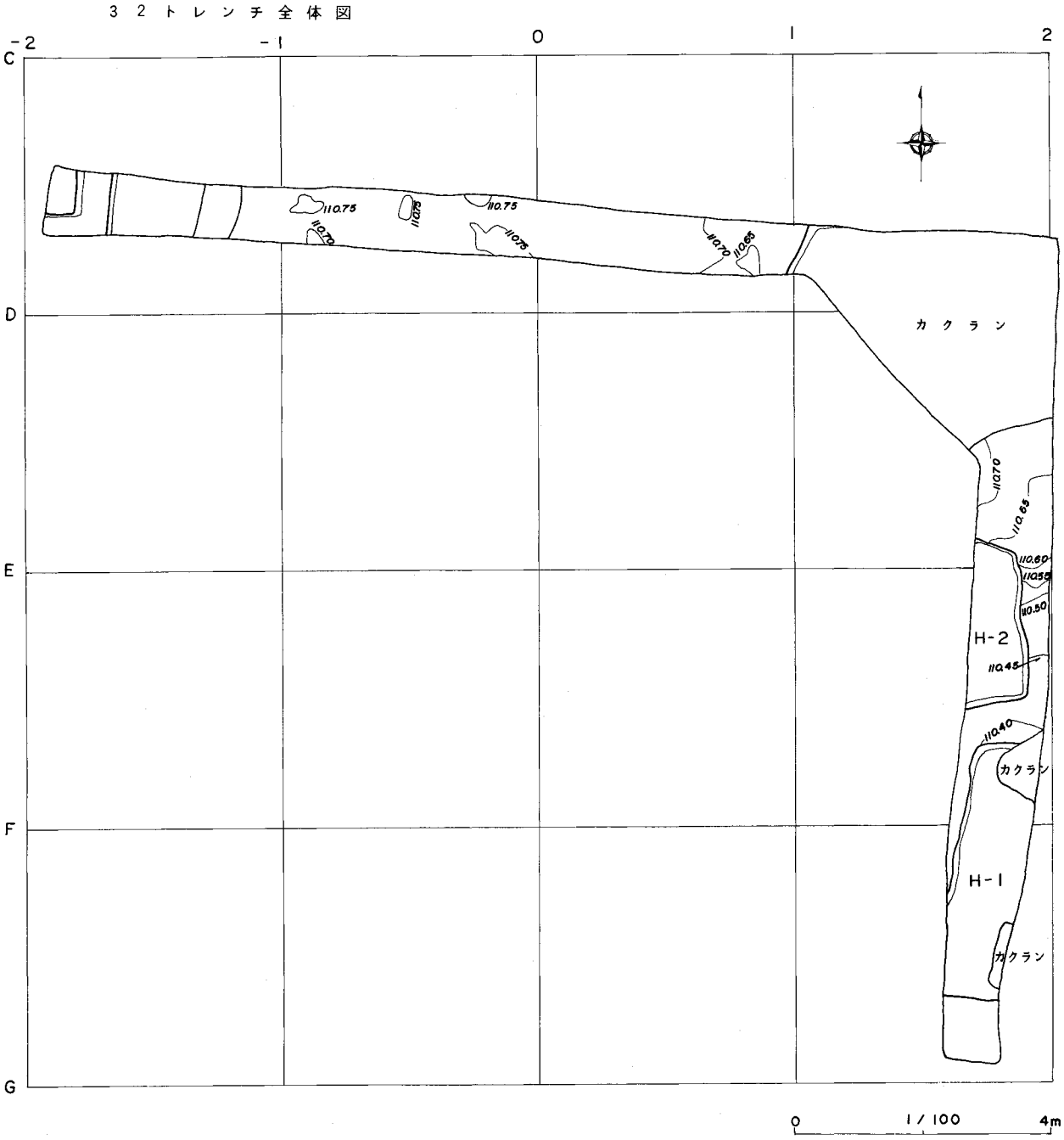
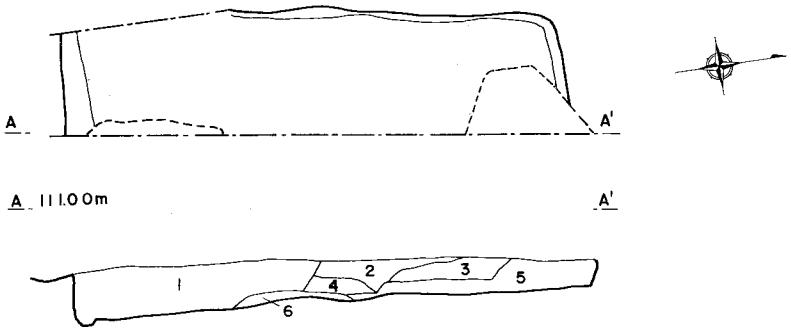


Fig.6　32トレンチ全体図

H － 1 号 住 居 址



H－1

1　表土　被攪乱層

2　褐色土層　根の侵入があり攪乱を受けている

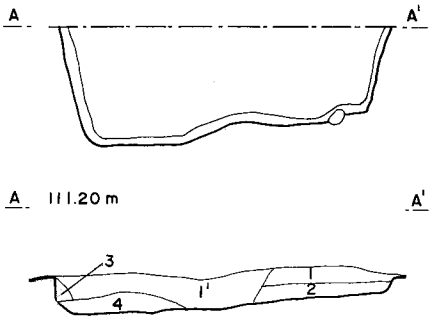
3　褐色細砂層　最近のものと思われる焼土粒や炭化物を含む

4　褐色弱粘中締土層　As-Bp ２％　Hr-Fp １％　焼土塊を含む

5　にぶい褐色の弱粘弱締土　細砂１０％を含む

6　黄褐色中粘高締土　酸化した砂粒を１０％As-Bp を１～２％含む

H － 2 号 住 居 址



H－2

1　黒褐色弱粘弱締土　1mmφのAs-Bp を２％含む

1′　黒灰色弱粘中締細砂　示標テフラを含まず

2　にぶい黄橙色の中粘高締細砂　酸化した砂粒を５％　As-Bpを１％含む

3　明黄褐色弱粘中締土　細砂を５％含む

4　黄褐色弱粘中締土　細砂を２％含む　根の侵入あり

0　1/60　2m

東 西 ト レ ン チ 出 土 文 字 瓦

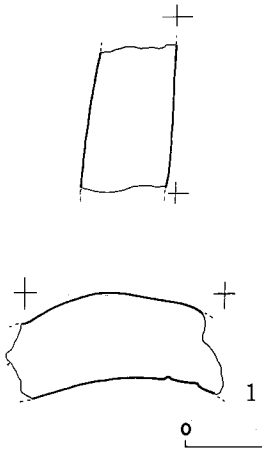
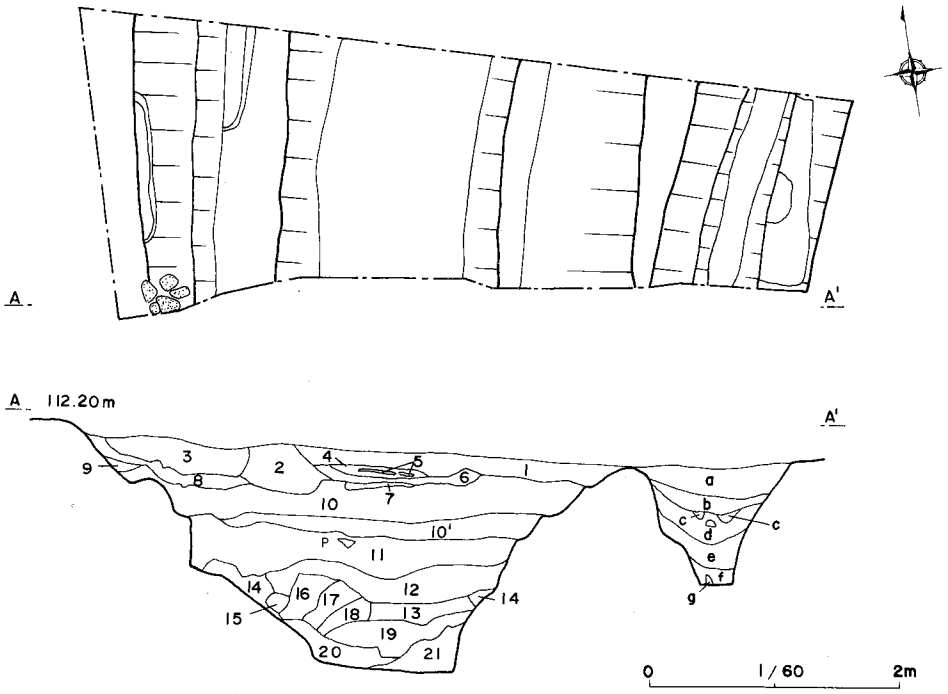


Fig. 7　32トレンチ遺構：H－1 ・H－2 号住居址，トレンチ出土遺物図

Fig. 8　33トレンチ全体図

W－1号溝・W－2号溝



W－1

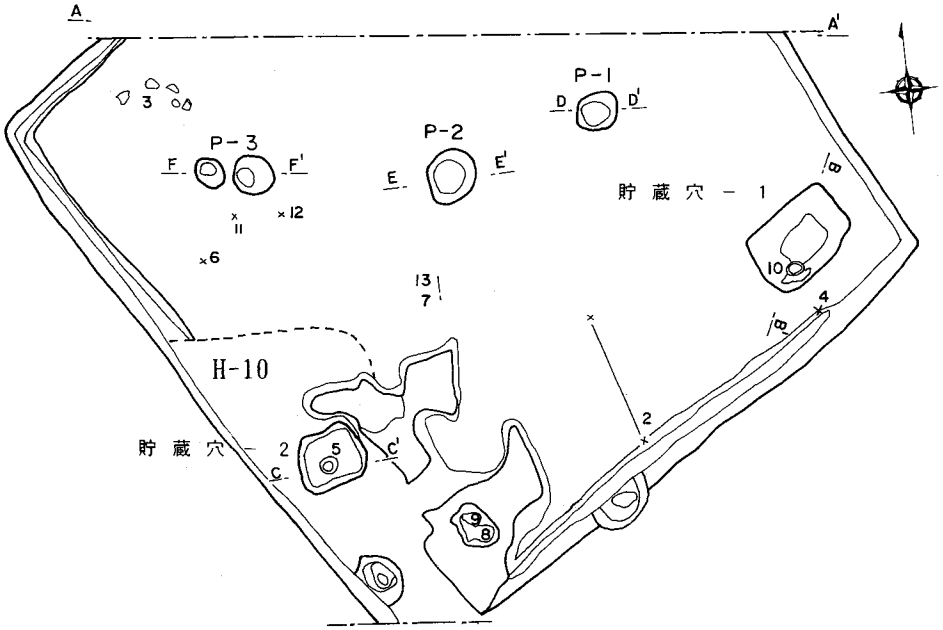
1　暗褐色中締粘質粗砂　Hr-Fp·As-Bp を３０％含み　ＳＪ粒を点在する
2　黒灰色中締弱粘粗砂　Hr-Fp ７％　ＳＪ粒３０％　暗灰色粘土ブロックを混在
3　Hr-Fp を７％混入する灰白色砂質細砂と２層が等しく混在する高締弱粘土
4　暗褐色弱締弱粘粗砂　Hr-Fp ５％　粘土粒５％を含む
5　黒褐色中締粘質微砂
6　暗黄褐色高締弱粘微砂　Hr-Fp·As-Bp ７％　ＳＪ粒３％を含む
7　黄褐色のＳＪ小ブロック葉理に褐色高締中粘細砂を４０％混入
8　黒褐色中締弱粘細砂と黄褐色ＳＪブロックが５０％づつ混在
9　灰黄色弱締中粘ＳＪ細砂
10　暗黄褐色高締弱粘微砂にHr-Fp·As-Bp １０％　炭化粒・遺物粒を３％含む
10'　10層に褐色ＳＪブロック１２％含む　10層より締まりが弱い
11　暗褐色中締粘質細砂　ＳＪ粗粒ブロック１０％　Hr-Fp ５％を含む
12　暗黄褐色中締微粘粗砂　ＳＪ小ブロック　Hr-Fp　小礫を３％含む
13　黄褐色粘質コロイド粗砂　ＳＪ砂を３０％　Hr-Fp　小礫を１０％含む
14　灰褐色ＳＪ粘質土とＳＪ砂に12層を混在する高締弱粘土
15　黄褐色中締微粘砂（脱水粘土）
16　青灰色高締ＳＪ砂
17　暗赤褐色高締ＳＪ砂　ＹＰを含むブロック７％混入
18　16層と17層の50／50混在土
19　黒褐色中締粘質粗砂にＳＪブロック　As-Cp 遺物粒を２０％含む
20　灰褐色中締粘質細砂にAs-Cp ３％を含む
21　青灰色ＳＪ砂に黄褐色粘土粒を混在

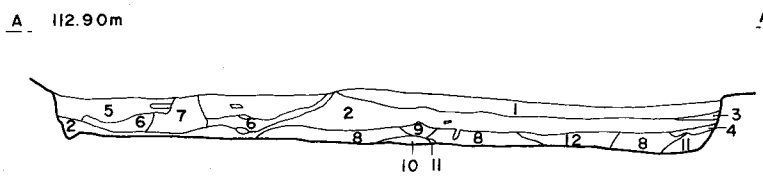
W－2
a　黒褐色中締弱粘砂質粗砂にＳＪブロックを点在
b　黒褐色中締弱粘細砂にＳＪブロック点在
c　褐色高締微粘微砂にＳＪブロックを混入
d　黒褐色中締弱粘細砂にＳＪブロック・遺物粒を含む
e　暗褐色中締弱粘細砂にAs-Cp ３０％　ＳＪ小ブロック点在
f　褐色中締弱粘コロイド砂に微小礫を１０％含む
g　灰白色ＳＪ粘質土

注：ＳＪ＝総社砂層構成土

Fig. 9　33トレンチ遺構（1）：W－1・W－2号溝址

H － 2 号 住 居 址

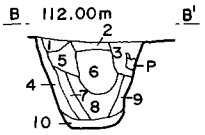




H－2

1 暗褐色中粘中締細砂 2～3mmφの粗砂を3%含む
2 暗褐色中粘中締細砂 焼土粒1% 炭化物1% SJ粒1%を含む
3 暗赤褐色弱粘高締細砂 焼土50% 1層を50%含む
4 暗青黒色土 炭化物80%と2層を20%混在
5 黒褐色中粘高締細砂 As系パミスを3%Hr-Fp 1% SJ粒1%を含む
6 黒褐色中粘高締細砂 As系パミスを1% Hr-Fp 1% SJ粒1%を含む
7 暗黒褐色中粘高締細砂 SJ粒3% As系パミスを1%含む
8 黒褐色弱粘高締細砂 SJブロック7% 炭化物・焼土粒を各1%含む
9 黒色中粘中締細砂 SJ粒2% 粗砂を1%含む
10 暗黒褐色中粘中締細砂 SJ粒3% 焼土1% 粗砂1%を含む
11 暗黄褐色中粘中締細砂 焼土粒2% SJ粒3%を含む
12 黒褐色中粘中締細砂 SJ粒1%を含む

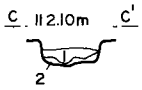
貯 蔵 穴 － 1 地 断 図



貯蔵穴－1

1 暗褐色高締弱粘細砂 遺物粒・炭化粒を30%含む
2 黒褐色高締微粘細砂 Hr-Fp 10% 遺物粒を含む
3 暗褐色中締粘質細砂 Hr-Fp 15% 遺物粒を含む
4 暗褐色中締粘質微砂 SJブロック 微粒Hr-Fp を5%含む
5 暗灰褐色中締弱粘細砂 SJブロック10% Hr-Fp 10% 微遺物粒7%混入
6 黒褐色弱締弱粘粗砂 SJブロック10% Hr-Fp 7% 砂30%混入
7 暗灰褐色中締粘質細砂 SJブロック 微小遺物粒を3%含む
8 暗褐色弱締粘質粗砂 微小礫10% SJブロック・遺物粒を5%含む
9 暗灰褐色中締粘質微砂 SJ小ブロック3% 微粒Hr-Fp を含む
10 灰黄色シルト SJ層の一部

貯 蔵 穴 － 2 地 断 図



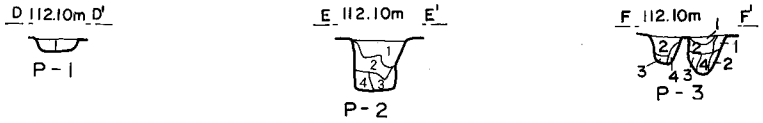
貯蔵穴－2

1 暗褐色弱粘中締粗砂
2 暗黄褐色弱粘弱締細砂

0 1/60 2m

Fig. 10 33トレンチ遺構（2）：H－2号住居址－1

H － 2 号 住 居 址 柱 穴



P－1

1　暗褐色中粘中締微砂　ＳＪ粒２%　細砂１%　Hr-Fp　１%混入

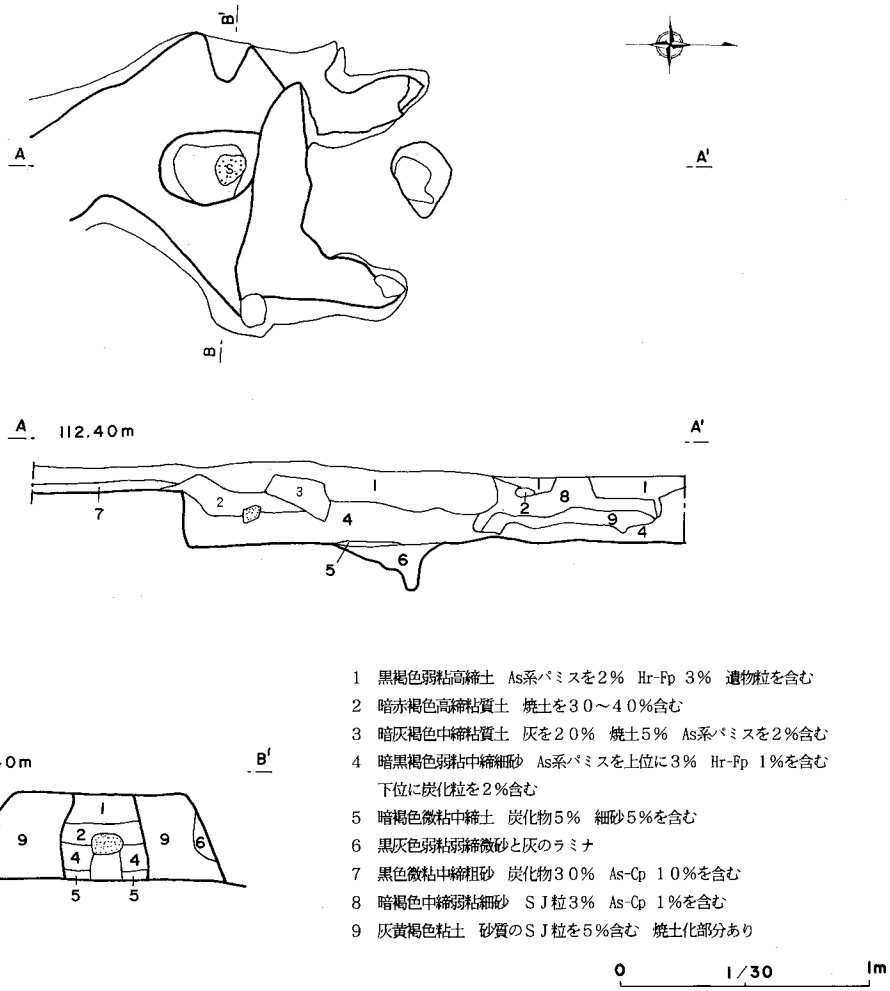
P－3

1　黒色中締微粘細砂　As-Cp　３%　ＳＪ粒１%を含む
2　黒色中締弱粘細砂　As-Cp　１%　ＳＪ粒５%を含む
3　黒褐色弱締弱粘細砂　ＳＪ粒３%を含む
4　黒色中締中粘細砂　As-Cp　１%を含む

P－2

1　暗褐色弱粘中締細砂
2　暗褐色中粘中締微砂　ＳＪ粒２%　細砂１%　Hr-Fp　１%
3　灰黄色微粘中締微砂　ＳＪ７０%と２層を３０%混在
4　灰黄色微粘中締微砂　ＳＪ９０%と２層を１０%混在

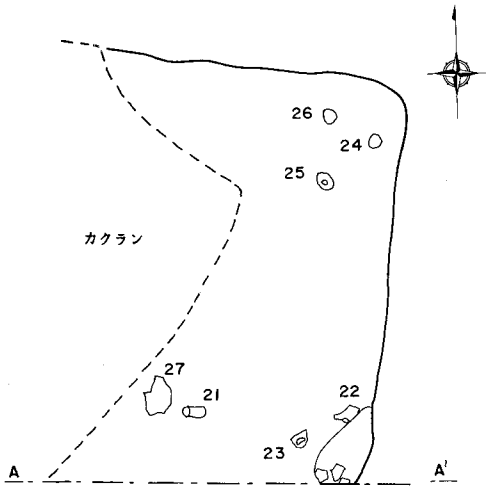
H － 2 号 住 居 址 カ マ ド

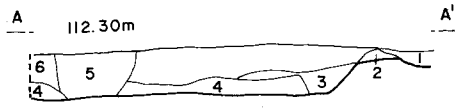


1　黒褐色弱粘高締土　As系パミスを２%　Hr-Fp　３%　遺物粒を含む
2　暗赤褐色高締粘質土　焼土を３０～４０%含む
3　暗灰褐色中締粘質土　灰を２０%　焼土５%　As系パミスを２%含む
4　暗黒褐色弱粘中締細砂　As系パミスを上位に３%　Hr-Fp　１%を含む
　下位に炭化粒を２%含む
5　暗褐色微粘中締土　炭化物５%　細砂５%を含む
6　黒灰色弱粘弱締微砂と灰のラミナ
7　黒色微粘中締粗砂　炭化物３０%　As-Cp　１０%を含む
8　暗褐色中締弱粘細砂　ＳＪ粒３%　As-Cp　１%を含む
9　灰黄褐色粘土　砂質のＳＪ粒を５%含む　焼土化部分あり

Fig. 11　33トレンチ遺構（3）：H－2号住居址－2

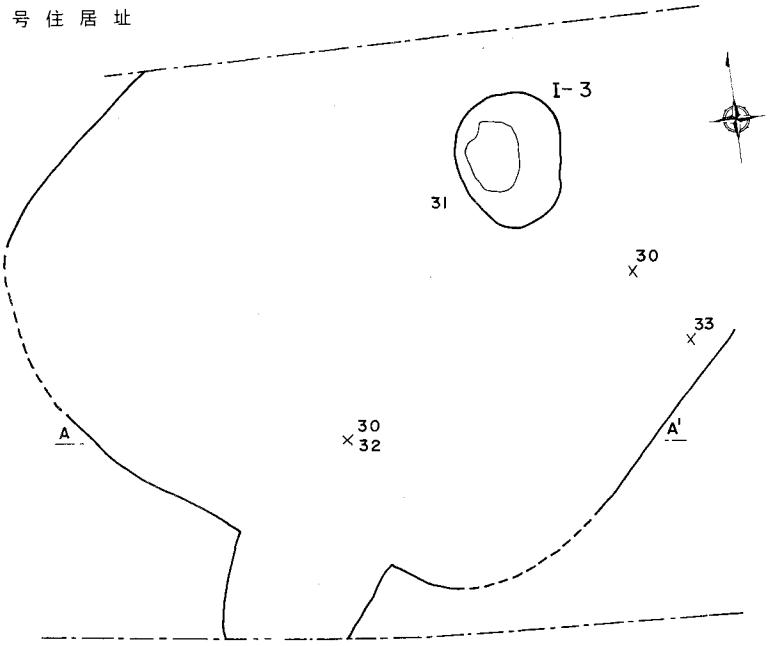
H － 6 号 住 居 址

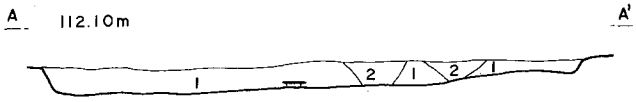




H－6
1 褐色中締中粘細砂 炭化物１０％ 粗遺物粒３％を含む
2 焼土
3 炭化層
4 黒褐色高締高粘微砂 As-Cp ３％ 微遺物粒３％を含む
5 根の侵入による撹乱層
6 建築廃棄物埋め込みによる撹乱層

H － 7 号 住 居 址



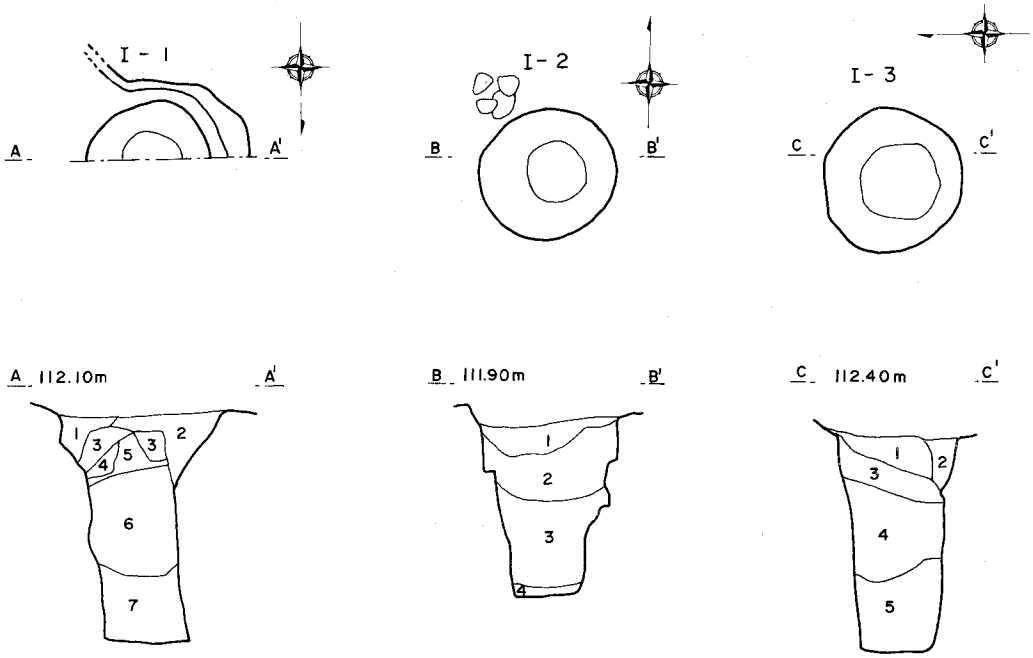


H－7
1 黒褐色高締微粘細砂 Hr-Fp ３％ As-Bp ７％ 炭化粒 小礫を含む
2 暗褐色高締中粘土に粗粒の砂が混じる ＳＪブロック 遺物粒を含む

0 1/60 2m

Fig. 12 33トレンチ遺構（４）：Ｈ－６・Ｈ－７号住居址

井戸址平面図　同地断図・土層注記



I－1

1　黒褐色弱粘中締細砂　As-Bp 5%　Hr-Fp 1%　ＳＪ粒1%　炭化物1%含む
2　黒褐色微粘中締粗砂　As-Bp 1%を含む
3　黒褐色細砂　暗黄色ＳＪを含む
4　暗褐色弱粘弱締細砂　微砂を5%含む
5　暗褐色中粘弱締細砂　上位に粗砂を5%含む
6　暗褐色中粘中締微砂　細砂も混じり3～5mmφの小礫1%を含む
7　暗褐色弱粘弱締粗砂　5mmφの小礫を3%含む

I－2

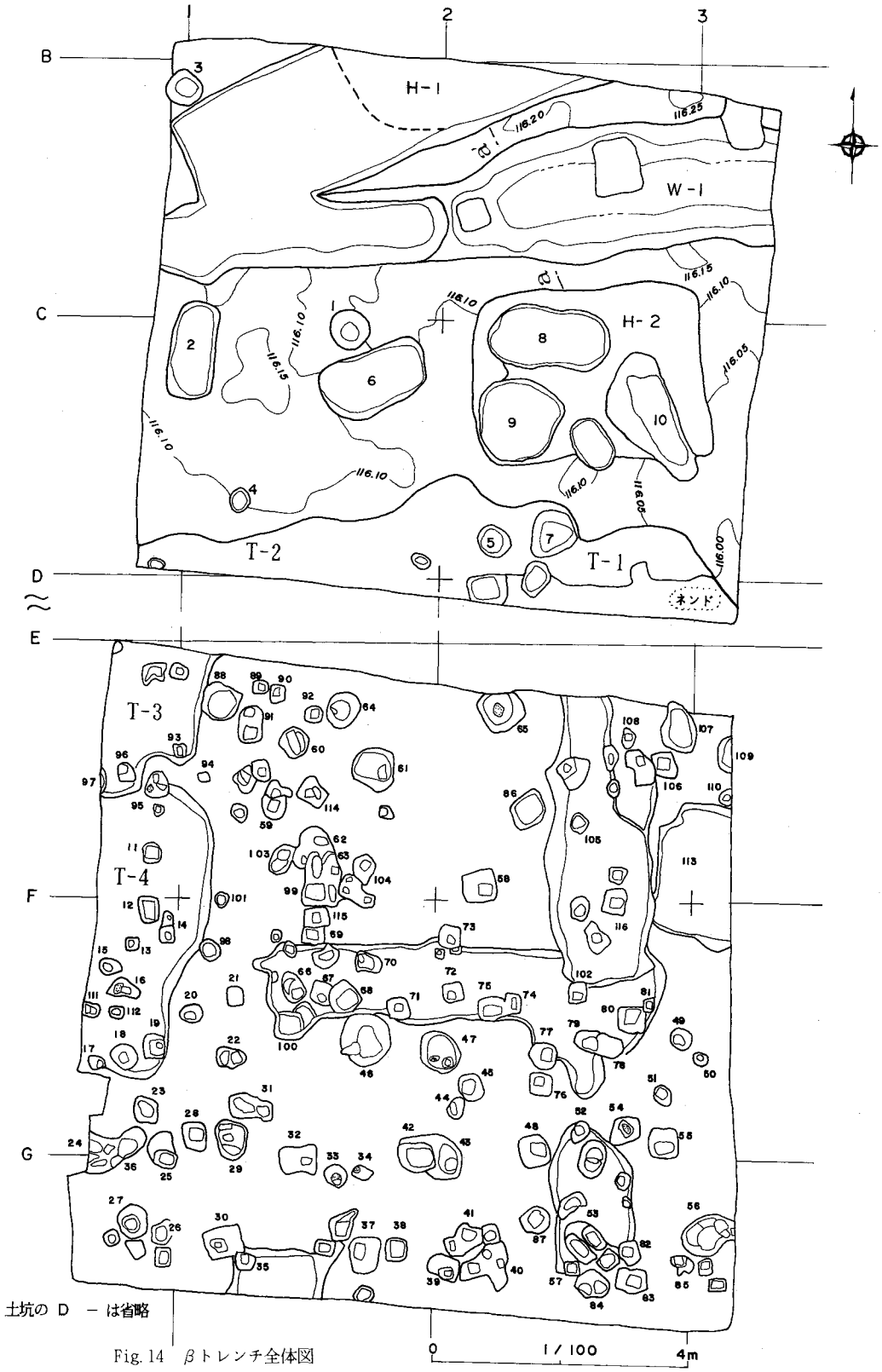
1　褐色弱締微粘細砂　炭化物・焼土を1%含む
2　暗灰色弱締微粘細砂　砂質土
3　灰褐色中締弱粘微砂
4　暗灰褐色中締中粘細砂　ＳＪ粒を3%含む

I－3

1　黒褐色弱粘中締細砂　ＳＪ粒を3%含む
2　黒褐色弱粘弱締細砂　ＳＪ粒2%　炭化粒1%を含む
3　黒褐色弱粘弱締細砂　ＳＪ粒1%　4層が斑紋状に混じる
4　黒色弱粘弱締粗砂　ＳＪ粒1%　3～5mmφの小礫を1%含む
5　黒色中粘中締微砂　5mmφの小礫を3%含む　4層より暗い

Fig. 13　33トレンチ遺構（5）：井戸址

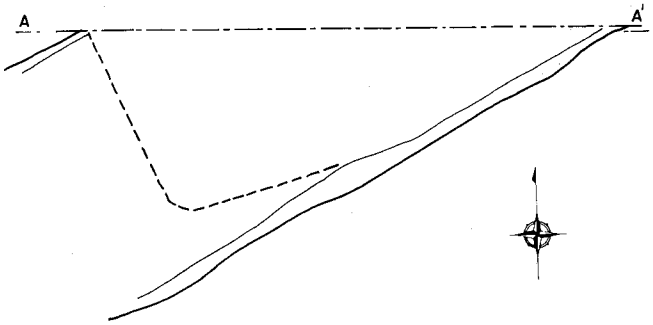
β トレンチ全体図

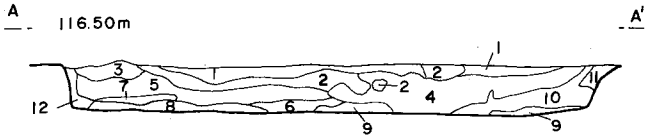


土坑の D ― は省略

Fig. 14　βトレンチ全体図

H － 1 号 住 居 址

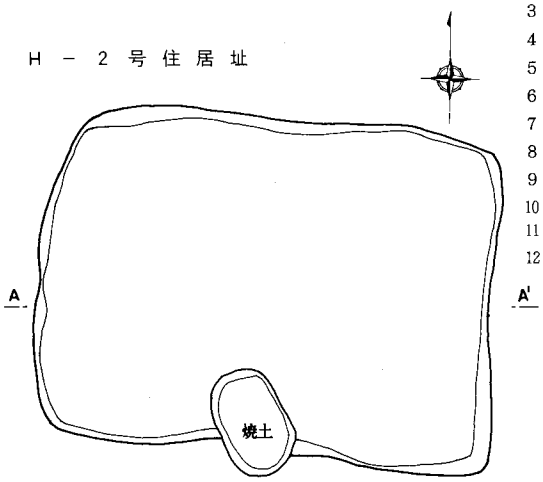


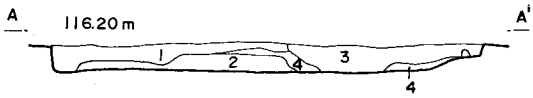


H－1

1　灰褐色微粘中締細砂　As-Bp 7%　ＳＪ粒２%と小礫を含む
2　灰褐色微粘微締細砂　As-Bp 3%　ＳＪ粒１%を含む
3　灰褐色微粘弱締細砂　挟雑物が少ない
4　褐灰色微粘弱締微砂　ＳＪブロック１%を含む
5　褐灰色微粘弱締細砂　ＳＪ粒２%と僅かなAs系パミスを含む
6　褐灰色微粘微締細砂　ＳＪブロック１%含む　５層よりやや暗い
7　灰褐色微粘微締微砂　ＳＪを僅かに含む
8　褐灰色微粘微締微砂　ＳＪを６０%　５層を４０%の混在土
9　褐灰色微粘微締細砂　ＳＪを３０%　６層を７０%の混在土
10　灰褐色微粘弱締細砂　ＳＪブロック２%と僅かな炭化物を含む
11　赤褐色微粘微締細砂　焼土３０%　灰褐色細砂７０%と小礫を僅かに含む
12　黄褐色微粘微締細砂　（ＳＪ層）

H － 2 号 住 居 址

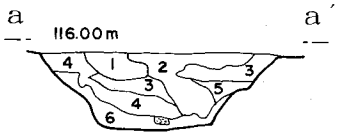




H－2

1　褐灰色細砂　粘性締まりなし　Hr-Fp 1%　ＳＪブロック１%を含む
2　褐灰色細砂　粘性締まりなし　微粒の白色ＳＪブロック５%を含む
3　灰褐色細砂　粘性締まりなし　ＳＪ粒１%　新しい炭化物を含む
4　黄褐色細砂　粘性締まりなし　３層を１０%混入

W － 1 地 断 図



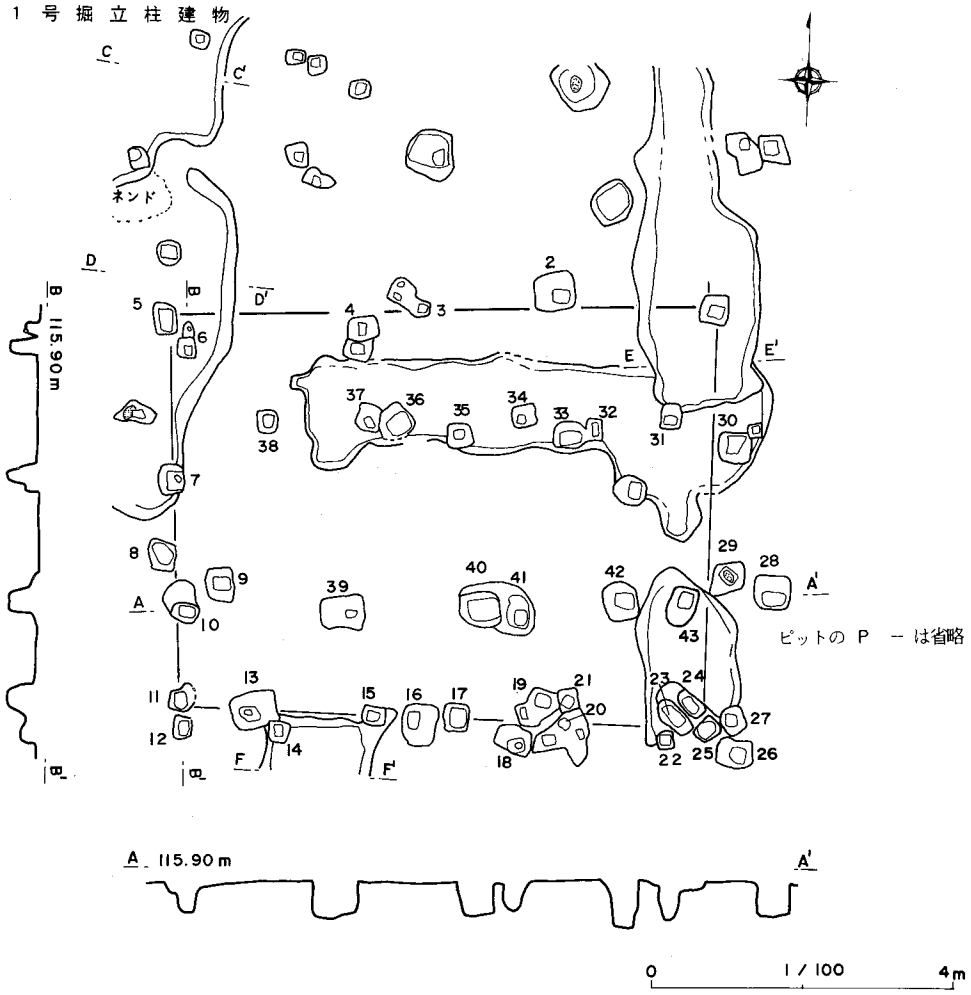
W－1

1　褐灰色弱粘中締粗砂　As-Bp 3%　Hr-Fp 1%　ＳＪ粒を含む
2　褐灰色弱粘弱締細砂　細砂６０%とＳＪ４０%の混在土
3　黄褐色弱粘弱締細砂　ＳＪ層の流入による
4　灰褐色弱粘弱締細砂　3～5mmφのAs-Bp 2%　ＳＪブロック１%を含む
5　暗黄褐色弱粘弱締細砂　２層に類似
6　褐色微粘弱締微砂　流れ込みの礫を伴いＳＪを５%混入する

0　1/60　2m

Fig. 15　βトレンチ遺構（1）：H－1・H－2号住居址，W－1号溝址

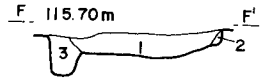
B－1号掘立柱建物



雨落ち溝地断図

1 暗灰褐色中締中粘微砂　微小ＳＪブロック１０％を含む
2 暗灰褐色中締中粘微砂　微小ＳＪブロック７％を含む
3 暗黄褐色ＳＪソフト　Hr-Fp　微小礫を５％含む
4 暗黄褐色弱締弱粘細砂　ＳＪソフトを３０％含む
5 暗灰褐色高締弱粘細砂　ＳＪハードの小ブロックを３０％含む
6 暗灰褐色中締弱粘粗砂　ＳＪ粒７％　Hr-Fp ３％を含む

1 黒褐色高締中粘細砂　ＳＪ粒を３０％含む
2 黒褐色中締中粘粗砂　ラミナ状ＳＪブロックを１５％含む　小礫あり
3 オリーブ褐色　ＳＪ砂
4 黄褐色ＳＪ砂

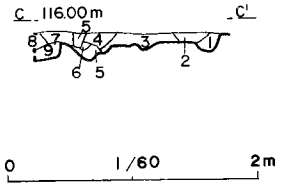


1 灰褐色弱粘中締細砂　ＳＪ粒を２％含む
2 黄褐色弱粘弱締微砂　褐色細砂３０％とＳＪ７０％の混土
3 灰褐色弱粘弱締粗砂　ＳＪ粒２％と２～３mmφの小礫を含む

0 1/60 2m

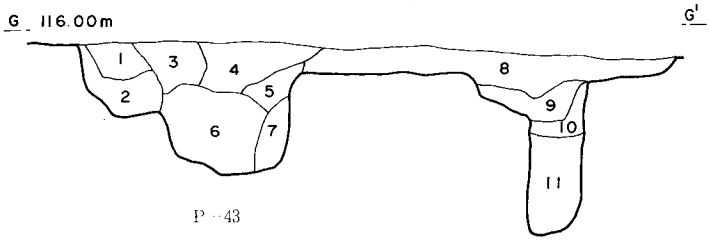
Fig. 16　βトレンチ遺構（２）：Ｂ－１号掘立柱建物址－１

雨落ち溝地断図



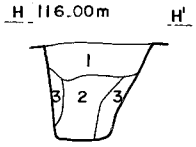
1 褐色弱締中粘細砂　ＳＪ粒３%を含む
2 褐色中締中粘細砂　ＳＪ粒３%を含む
3 暗褐色高締中粘粗砂　微小礫　ＳＪ粒を５%含む
4 暗灰褐色高締弱粘粗砂　Hr-Fp を５%含む
5 黄褐色ＳＪハードブロック
6 黒褐色高締弱粘粗砂
7 暗灰褐色高締中粘細砂　微小礫５%を含む
8 灰褐色高締中粘粗砂　ＳＪブロック５%を含む
9 灰褐色中締高粘微砂　小礫あり

主要ピット地断図・土層注記



P－43

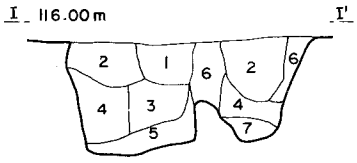
P－23



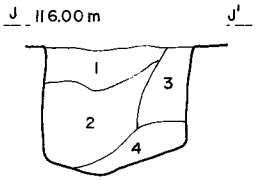
P－22

1 暗黄褐色ＳＪに黒褐色土を３０%含む弱締中粘粗砂　Hr-Fp 点在
2 黄褐色高締中粘細砂　ＳＪ・斑紋を２０%含む
3 暗褐色中締中粘細砂　ＳＪ粗砂を１０%含む
4 褐色弱締弱粘粗砂　ＳＪ粗砂を２０%含む
5 暗褐色中締中粘粗砂　ＳＪ粒を２０%含む
6 暗褐色中締中粘粗砂　小礫状のＳＪ粗粒を１５%含む
7 暗褐色中締中粘細砂　ＳＪ砂を５%含む
8 オリーブ褐色中締中粘粗砂　ＳＪブロックを１０%含む
9 暗オリーブ褐色中締中粘粗砂　ＳＪブロックを５%含む
10 暗黄灰色中締中粘粗砂　（ＳＪ粗砂）
11 オリーブ灰色高締微粘粗砂　（ＳＪ粗砂）

1 褐灰色弱粘弱締細砂　ＳＪ粒を僅かに含む
2 灰褐色弱粘弱締細砂　ＳＪ粒を１%含む
3 灰褐色弱粘弱締細砂　ＳＪブロックを３０%含む



P－40・41



P－39

1 黄褐色中締微粘細砂に微小Hr-Fp ７%とHr-Fp ３%を含む弱締微粘細砂の5/5
2 １層が４／６で混在　１層より締まりが弱い
3 黄褐色中締微粘細砂　灰状のＳＪ微小粒とHr-Fp を３%含む
4 暗黄褐色弱締微粘細砂
5 褐灰色高締弱粘砂質粗砂　微小礫を１０%含む
6 暗黄褐色高締弱粘細砂　（ＳＪの一部）
7 灰褐色弱締弱粘微砂　灰白色のアッシュを含む

1 褐色弱粘中締細砂　やや黄色味を帯びるＳＪを３０%含む
2 褐色弱粘中締細砂　ＳＪ粒を１０%含む
3 褐灰色弱粘弱締微砂　ＳＪ粒１%含み炭化物を僅かに含む
4 暗褐灰色弱粘弱締微砂　ＳＪ粒を僅かに含む

0　1/30　1m

Fig. 17　βトレンチ遺構（３）：Ｂ－１号掘立柱建物址－２

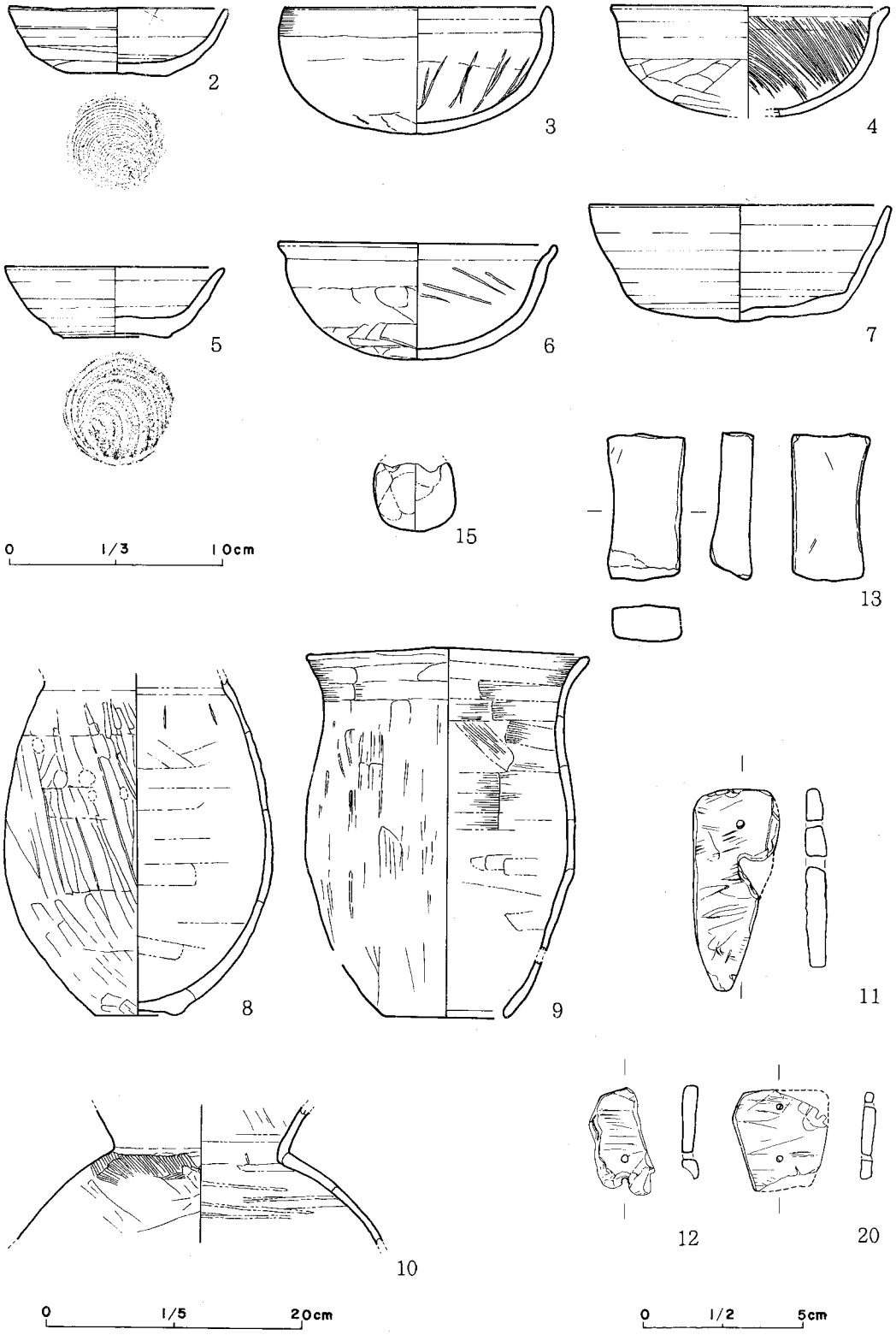


Fig. 18 出土遺物実測図－1

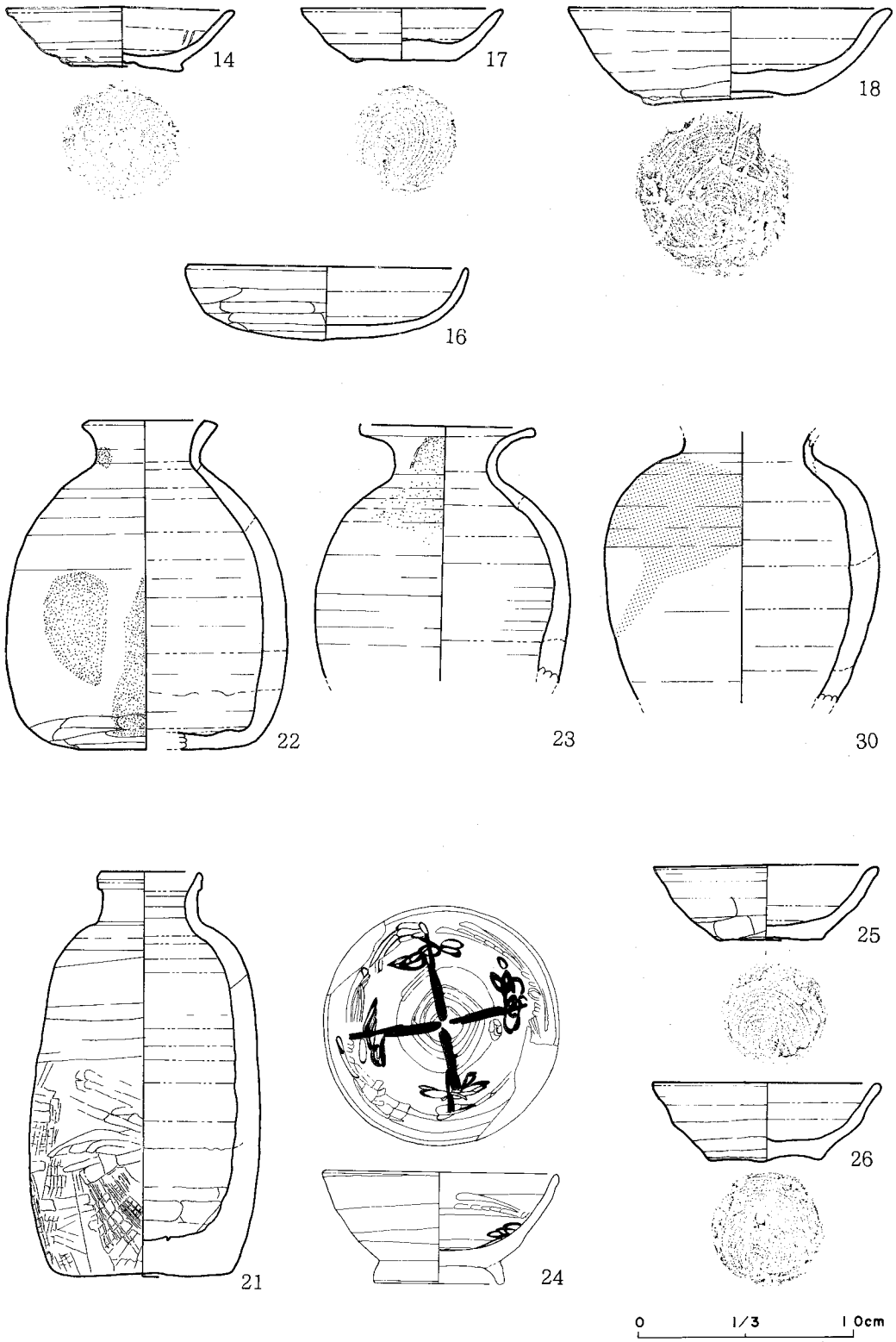


Fig. 19　出土遺物実測図－2

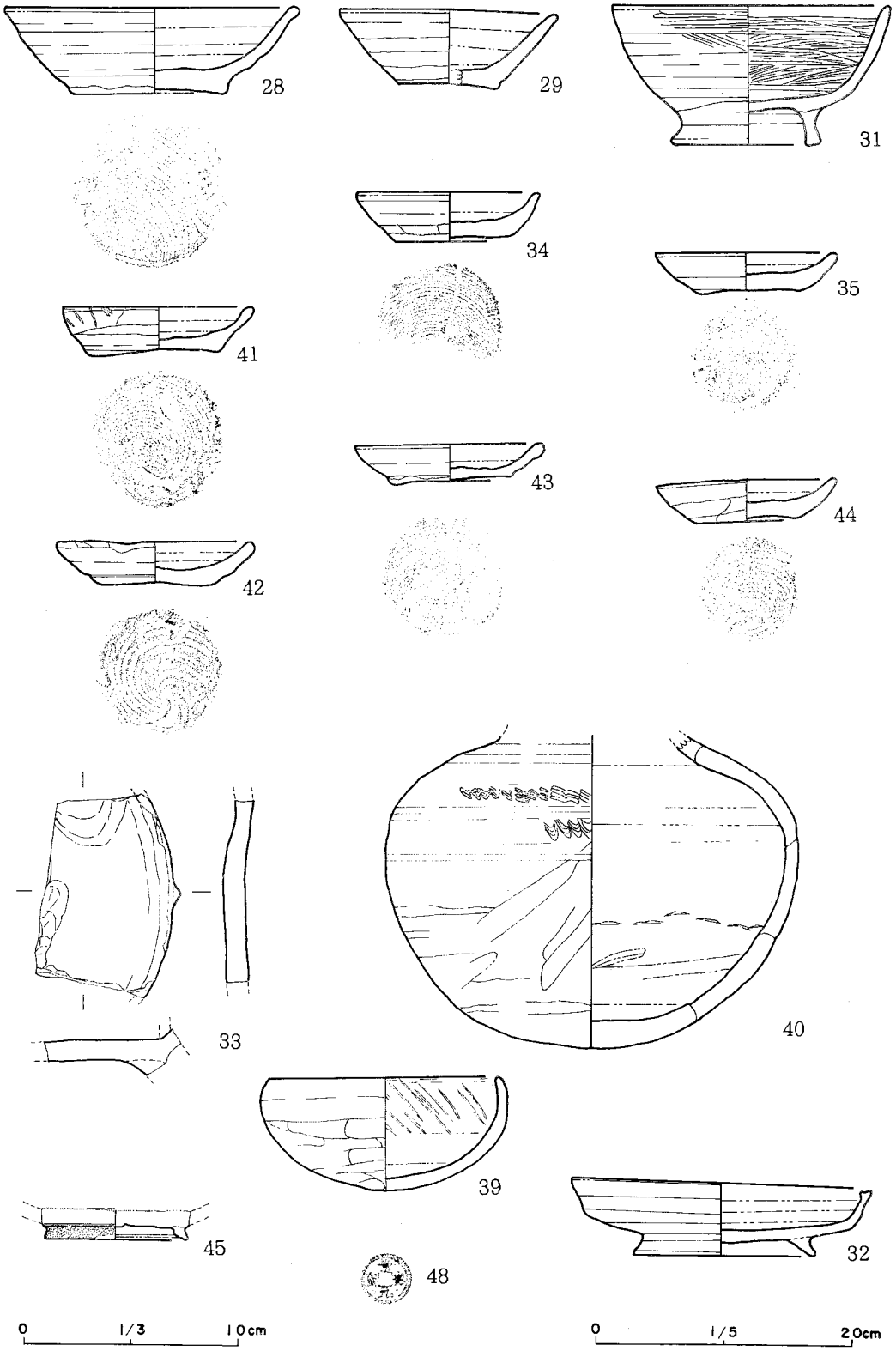


Fig. 20　出土遺物実測図－3

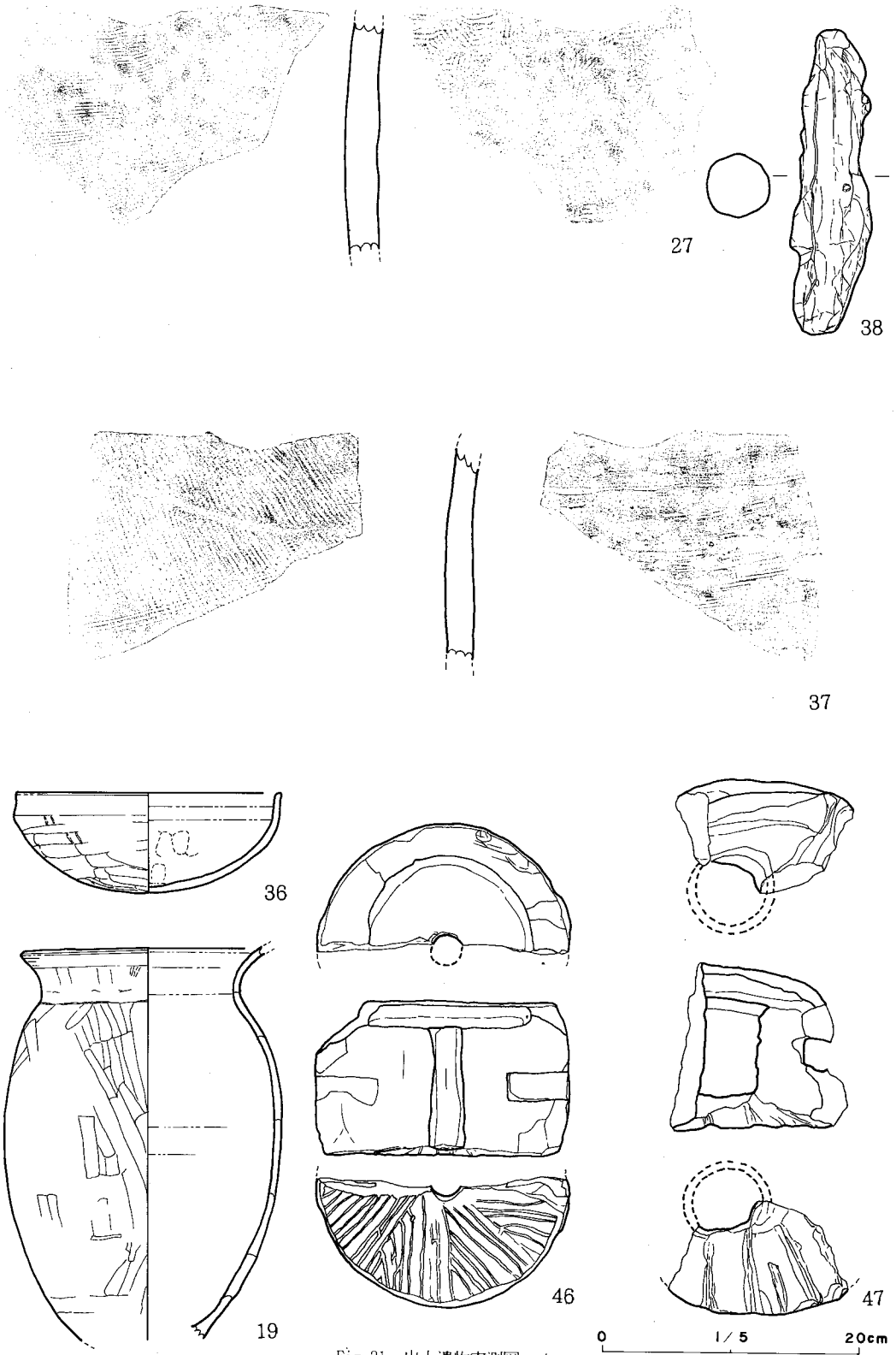
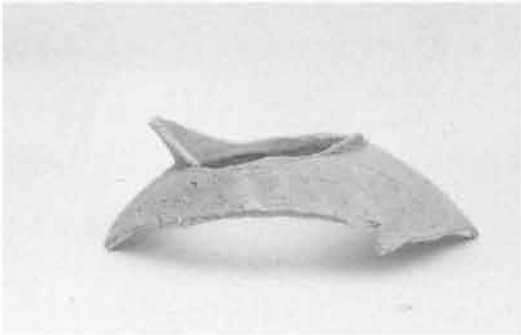


Fig. 21　出土遺物実測図－4

1　出土遺物No.1

2　出土遺物No.2

3　出土遺物No.39



4　出土遺物No.10

5　出土遺物No.20・11・12

6　出土遺物No.13

7　出土遺物No.40

8　出土遺物No.15

9　出土遺物No.21

10　出土遺物No. 9

11　出土遺物No. 8

12　出土遺物No.24

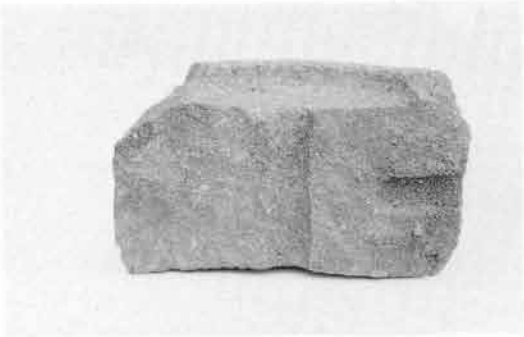
13　同左内面

14　出土遺物No.33

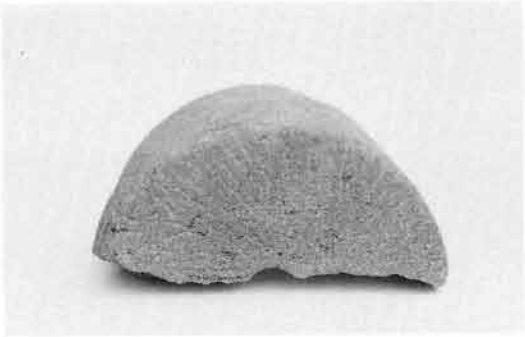
15　同左裏面

16　出土遺物No.32

17　出土灯明皿・他



18　出土遺物No.40



19　同左底面

20　32トレンチ　H－1・2号住居址

21　33トレンチ全景（東から）

22　33トレンチ　W－1号溝址

23　33トレンチ　H－6号住居址遺物出土状況

24　H－6号住居址遺物出土状況

25　H－6号住居址遺物出土状況

26　H－7号住居址遺物出土状況

27　H－7号住居址遺物出土状況

28　33トレンチ　H－2号住居址

29　同左カマド

30　β トレンチ北区全景（南から）

31　β トレンチ南区全景（北から）

抄　　録

フリガナ	モトソウジャミョウジンイセキ
書名	元総社明神遺跡Ⅻ
副書名	西部第三明神土地区画整理に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	元総社明神遺跡
シリーズ番号	Ⅻ
編著者名	新保一美
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664番地の4
発行年月日	西暦1994年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャミョウジン元総社明神遺跡Ⅻ	マエバシシソウジヤマチ，モトソウジャマチ 前橋市総社町，元総社町	10201	5A61	36°23′00″	139°02′31″	19930910 19931125	602㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
32トレンチ	集落跡	平安時代	竪穴住居址　2軒	土師器（甕 羽釜 坏 瓦片）	
33トレンチ	集落跡	古墳時代中期	竪穴住居址　5軒	土師器（甕 高坏 椀坏 手づくね）	
〃	集落跡	奈良平安時代	竪穴住居址　5軒	須恵器（羽釜 灯明皿 瓶 盤 硯 甕 坏 椀）	
〃	溝跡	不明	溝跡　3条	土師器（坏 瓦片等）	
β トレンチ	集落跡	古墳時代	竪穴住居址　2軒	土師器（坏）	
〃	集落跡	奈良平安時代	掘立柱建物址　1軒	緑釉高台椀、古銭	
〃	溝跡	不明	溝跡　1条	石臼他	

1994年　3月　15日　印刷
1994年　3月　20日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

編集　スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1

印刷　有限会社檸檬企画
前橋市稲荷新田町406番地の2